

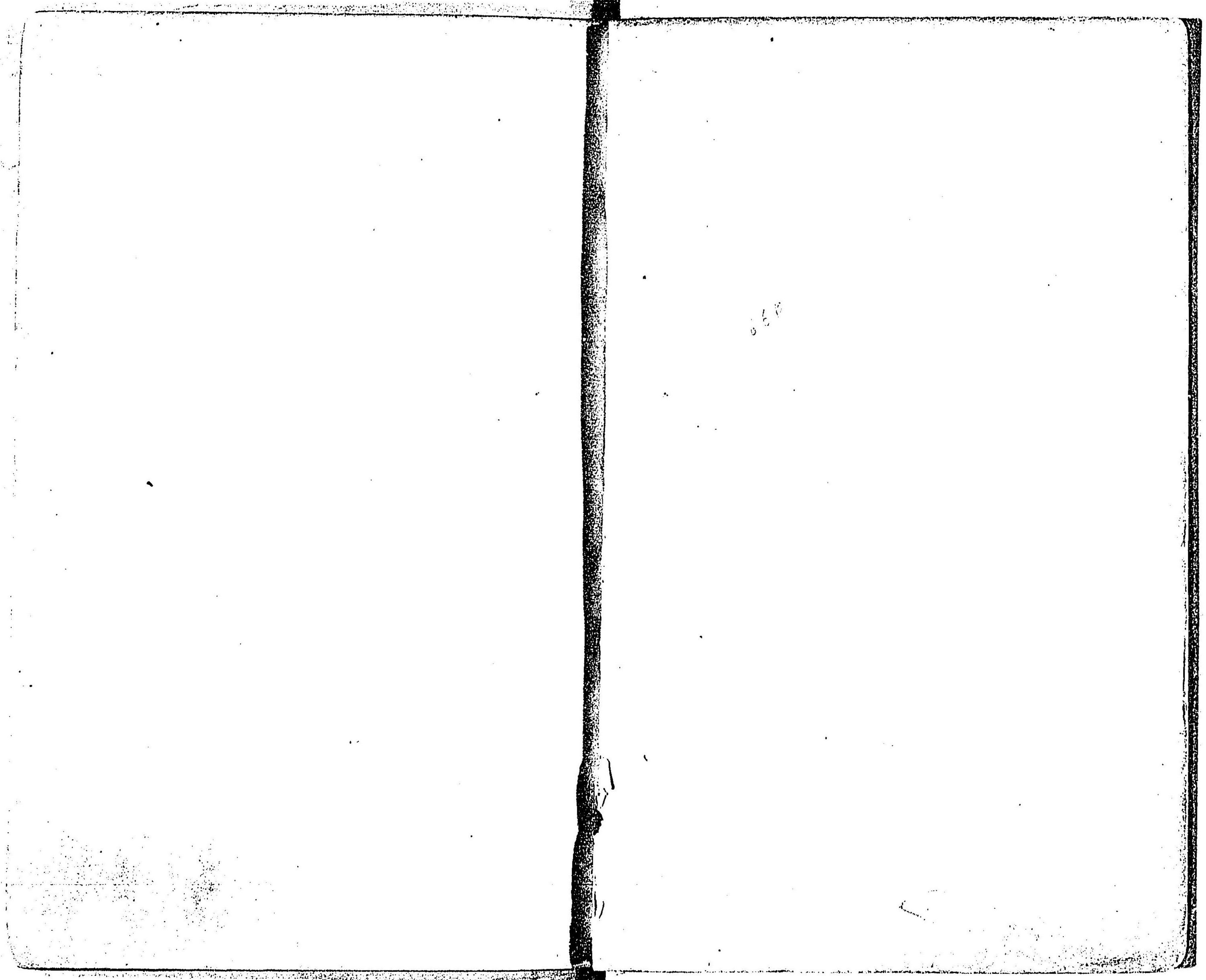
綠蔭叢書第三篇

小說

家

下卷

島崎藤村著



綠蔭叢書は藤村の著作を
刊行するものにて、一年一
冊もしくは二年一冊、成る
に随ひ篇を重ねるの豫定
なり。されば世にある多く
の叢書に比べて、多少其性
質を異にするもの。紙数の
如き毎篇心ずしも一定し
難しといへども、版本の素
質はすべて讀者のために
親切ならむことを旨とす。

綠蔭叢書

第一篇

『破戒』

小説、鏘木清方氏挿畫、
紙數五百七十八頁、定
價金七十錢（明治三十
九年）

第二篇

『春』

小説、和田英作氏挿畫、
紙數五百八十三頁、全
一冊讀切、定價金九十
錢、（小包料市内金四錢、
市外金八錢（明治四十
一年）

第三篇

『家』

全二冊

發賣元、東京神田裏神保
町一番地 上田屋

總
書
室
全
王
品
官



95.55

家

綠蔭叢書第三篇

下卷(全二册)

44.11.11

島崎藤村著

敷座

書馬生壬島有

家

下

卷

家

橋本の正太は、叔父を訪ねやうとして、兩側に樹木の多い郊外の道路へ出た。叔父の家は広い植木屋の地内で、金目垣一つ隔て、直にその道路へ接したやうな位置にある。垣根の側には、細い乾いた溝がある。人通りの少い、真空のやうに静かな初夏の晝過で、荷車の音もしなかつた。垣根に近い窓のところからは、叔母のお雪が顔を出して、格子に取絶りながら屋外の方を眺めて居た。正太は窓の下に立つた。丁度その家の前に、五歳ばかりに成る兒が餘念もなく遊

んで居た。

『叔母さん、菊ちゃんのお友達？』

心易い調子で、正太はそこに立つたまゝお雪に尋ねて見た。子供は、知らない大人に見られることを羞ぢるといふ風であつたが、馳出さうともしなかつた。

短い着物に細帯を巻付けた斯の娘の様子は、同じ年頃のお菊のことを思出させた。

家

お雪が夫と一緒に、三人の娘を引連れ、遠く山の上から都會の方へ移つた時は、新しい家の樂みを想像して來たものであつた。引越の混雜の後で、三番目のお繁

——まだ誕生を済ましたばかりのが亡くなつた。丁度それから一年過ぎた。復た二番目のお菊が亡くなつた。あのお菊が小さな下駄を穿いて、好きな唱歌を歌つて歩くやうな姿は、最早家の周圍に見られなかつた。

姉のお房とは違ひ、お菊の方は遊友達も少なかつた。『菊ちゃん、お遊びなさいな』

と言つて、よく誘ひに來たのは斯の近所の娘である。

道路には日があたつて居た。新緑の反射は人の頭腦の内部までも入つて來た。明るい光と、悲哀とて、お雪はすこし逆上るやうな眼付をした。

『まあ、正太さん、お上んなすつて下さり。』

斯う叔母に言はれて、正太は垣根越しに家の内を覗いて見た。

『叔父さんは？』

『一寸歩いて來るなんて、大屋さんの裏の方へ出て行きませう。』

『ぢや、私も、お裏の方から廻つて參りませう。』

正太は其足で、植木屋の庭の方へ叔父を見つげに行くことにした。

斯の地内には、叔父が借りて住むと同じ型の平屋がまた外にも二軒あつて、その板屋根が庭の樹木を隔て、高い草葺の母屋と相對して居た。植木屋の人達は新

家

茶を造るに忙しい時であつた。縁日向の花を仕立てる畠の盡きたところまで行くと、そこに木戸がある。その木戸の外に、茶島、野菜島などが續いて居る。畠の間の小徑のところへ正太は叔父の三吉と一緒に成つた。

家

新開地らしい光景は二人の眼前に展けて居た。ところ／＼の樹木の間には、新しい家屋が光つて見える。青々とした煙も立ち登りつゝある。

三吉は眺め入つて、

『どうです、正太さん、一年ばかりの間に、随分この邊は變りましたらう。』

と弟か友達にでも話すやうな調子で言つて、茶島の横手に養鶏所の出來たことなどまで正太に話し聞せた。

何となく正太は元氣が無かつた。彼の上京は、叔父が長い仕事を持つて山を下りたよりも早かつた。一頃は本所邊に小さな家を借りて、細君の豊世と一緒に假の世帯を持つたが、間もなくそこも疊んで了ひ、細君は郷里へ歸し、それから單獨に成つて事業の手蔓を探した。彼の氣質は普通の平坦な道を歩かせなかつた。乏しい旅費を懐にしながら、彼は遠く北海道から樺太まで渡り、空しくコルサコフを引揚げて来て、青森の旅舎で酷く煩つたこともあつた。もとより資本あつての商法では無い。磐城炭の賣込を計劃したことも有つたし、南清地方へ出掛けやうとして、會話の稽古までして見たことも有つた。未だ彼は是といふ事業に取付かなかつた。唯、焦心つた。

家

それはかりては無い。叔父といふ叔父は、いづれも東京へ集つて来て居る。長いこと家に居なかつた實叔父は壯健で歸つて来て居る。森彦叔父は山林事件の始末

をつけて、更に別方面へ動かうとして居る。三吉叔父も、漸く山から持つて来た仕事を纏めた。早く東京で家を持つやうに成らう、斯の考へは正太の胸の中を往來して居た。

家

動き光る若葉のかげで、三吉、正太の二人はしばらく時を移した。やがて庭の方へ引返して行つた。葱を仕立てる場所について、植木室の側を折れ曲ると、そこには盆栽棚が造り並べてある。香の無い、とは言へ誘惑するやうに美しい瓣の花が盛んに咲亂れて居る。植木屋の娘達は、いづれも素足に尻端折て、威勢よく井戸の水を汲んで居るのもあれば、如露で花に灑いで居るのもあつた。三吉は自分の子供に逢つた。

『房ちゃん。』

と正太も見つけて呼んだ。

お房は、耳のあたりへ垂下る厚い髪の毛を煩さそうにして、うつとりとした眼付で二人の方を見た。何處か気分がすぐれない斯の子供の様子は、餘計にその容貌を娘らしく見せた。

『叔父さん、まだ房ちゃんは全然快くなりませんかネ。』

『どうも、君、熱が出たり退いたりして困る。二人ばかり醫者にも診て貰ひましたかね。大して悪くもなさそうですが、快くも成らない——なんでも醫者の言ふには臆から来て居る熱なんだそうです。』

家

斯様な話をしながら、二人はお房を連れて、庭づたひに井戸のある方へ廻つた。

『でも、房ちゃんは餘程姉さんらしく成りましたネ。』

と正太は木犀の樹の側を通る時に言つた。

この木犀は可成の古い幹で、細長い枝が四方へ延びて居た。それを境に、疎な竹

の垣を繞らして、三吉の家の庭が形ばかりに區別してある。

『お雪、房ちゃんに薬を服ましたかい。』

と三吉は庭から尋ねて見た。正太も縁側のところへ腰掛けた。

『奈何いふものか、房ちゃんは彼様な風なんですよ。』とお雪はそこへ来て、娘の方を眺めながら言つた。『すこし屋外へ遊びに出たかと思ふと、直に歸つて来て、ゴロ／＼して居ます。今も、父さん達のところへ行つて見ていらつしやつて、私が無理に勸めて遣つたんですよ。』

家

長い勞作の後で、三吉も疲れて居た。不思議にも彼は休息することが出来なかつた。唯疲勞に抵抗するやうな眼付をしながら、甥と一緒に庭へ向いた部屋へ上つ

た。

家

『正太さん、大屋さんから新茶を貰ひました——一つ召上つて見て下さる。』
 斯う言つても雪が持運んで来た。三吉は、その若葉の香を嗅ぐやうなやつを、甥にも勧め、自分でも啜つて、仕事の上の話を始めた。彼の話はある露西亞人のことに移つて行つた。その人のことを書いた本の中に、細君が酸乳といふものを製へて、著作で勞れた夫に飲ませたといふところが有つた。それを言出した。
 『彼様いふ強壯な體格を具へた異人ですらも左様かナア、と思ひましたよ。なにしろ、僕などは随分無理な道を通つて來ましたからネ。仕事が濟んで、いよくそこへ筆を投出した時は——その心地は、君、何とも言へませんでした。部屋中ゴロ／＼轉がつて歩きたいやうな氣がしました。』
 正太は笑はずに居られなかつた。

家

三吉は言葉を繼いで、『自分の行けるところまで行つて見やう——それより外に僕は何事も考へて居なかつたんですネ。一方へ向いては艱難とも戦はねばならずサ。それに子供は多いと來てませう。ホラ、あのお繁の亡くなつた時には、山から書籍を詰めて持つて來た茶箱を削り直して貰つて、それを子供の棺にして、大屋さんと二人で寺まで持つて行きました。左様いふ勢でしたサ。お繁が死んで呉れて、反つて難有かつたなんて、串談半分にも僕は其様なことをお雪に話しましたよ……ところが君、今度は家のやつが鳥目などに成るサ……』
 『左様／＼。』と正太も思出したやうに、『あの時はエラかつた。私も新宿まで鶏肉を買ひに行つたことが有りました。』
 『そんな思をして骨を折つて、漸くまあ何か一つ爲た、と思つたら奈何でせう。復たお菊が亡くなつた。僕は君、悲しいなんていふところを通越して、呆氣に取

られて了ひました——まるで暴風にても、自分の子供を浚つて持つて行かれたやうな——』

思はず三吉は斯様なことを言出した。斯の郊外へ引移つてから、彼の家では初めての男の児が生れて居た。種夫と言つた。その乳呑兒を年若な下婢に渡して置いて、やがてお雪も二人の話を聞きに来た。

家

『どんなにか叔母さんも御力落してせう。』と正太はお雪の方へ向いて、慰め顔に、郷里の母からも、その事を手紙に書いて寄しました。』

『菊ちゃんが死んぢやつたんでは、眞實にツマリません。』とお雪が答へる。

『此頃は君、大變な婦人が僕の家へ舞込んで來ました。』と三吉が言つて見た。『一切下げ髪にして、黒い袴を穿いてネ。突然入つて來たかと思ふと、説教を始めました。恐しい權幕でお雪を責めて行きましたッけ。』

家

『大屋さんの御親類。』とお雪も引取つて、『その人が言ふには、なんでも私の信心が足りないんですッて——ですから私の家には、斯様に不幸ばかり續くんですッて——是邊は、貴方、それは信心深い處なんですよ。』斯う正太に話し聞かせた。不安な眼付をしながら、三吉は家の内を眺め廻した。中の部屋の柱のところには、お房がリポンの箱などを取出して、遊びに紛れて居た。三吉は思付いたやうに、お房の方へ立つて行つた。一寸、子供の額へ手を宛て、見て、復た正太の前に戻つた。

其時、表の格子戸の外へ來て、何かゴト／＼言はせて居るものが有つた。

『菊ちゃんのお友達が來た。』

と言つて、お雪は玄關の方へ行つて見た。しばらく彼女は上り端の障子のところから離れなかつた。

家

『オイ、菓子でも呉れて遣りナ。』

と夫に言はれて、お雪は中の部屋にある佛壇の扉を開けた。そして、新しい位牌に供へてあつた物を取出した。近所の子供が禮を言つて、馳出して行つた後でも、まだお雪は耳を澄まして、小さな下駄の音に聞入つた。

女學生風の袴を着けた娘がそこへ歸つて來た。お延と言つて、郷里から修行に出て來た森彦の總領——三吉が二番目の兄の娘である。この娘は叔父の家から電車で學校へ通つて居た。

『兄さん、被入しやい。』

とお延は正太に挨拶した。從兄妹同志の間ではあるが日頃正太のことを『兄さん、

兄さん』と呼んで居た。

毎日のやうにも雪は子供の墓の方へ出掛けるので——尤も、寺も近かつたから——其日もお延を連れて行くことにした。後に残つた三吉と正太とは、互に足を投出した。寝轉んだりして話した。

其時まで、正太は父の達雄のことに就いて、何事も話さなかつた。遂かに、彼は坐り直した。

家

『まだ叔父さんにも御話しませんでしたでしたが、漸く吾家の阿父の行衛も分りました。』

斯様なことを言出した。久しく居所さへも不明であつた達雄のことを聞いて、三吉も身を起した。

『先日、Uさんが神戸の方から出て來まして、私に逢ひたいといふことですか

ら——』と言つて、正太は聲を低くして、『其時Uさんの話にも、阿父も彼方で教員してるそうです。まあ食ふだけのことには困らん……それにしても、彼様に家を滅茶々々にして出て行つた位ですから、もうすこし阿父も何か爲るかと思ひましたよ。』

家

『あの若い藝者は奈何しましたらう——達雄さんが身受をして連れて行つたといふ少婦が有るぢやありませんか。』

『あんなものは、最早疾に奈何か成つて了ひましたあね。』

『左様かナア。』

『で、叔父さん、Uさんが言ふには、考へて見れば橋本さんも御氣の毒ですし、彼様して唯孤獨で置いても奈何かと思ふからして、せめて家族の人と手紙の遣取位はさせて進げたいものですツて。』

『では、何かネ、君は父親さんと通信を始める積りかネ。』と三吉が尋ねた。

『否。』正太の眼は輝いた。『勿論——私が書くべき場合でもなし、阿父にしたころが書けもしなからうと思ひます。そりやあもう、阿父が店のものに對しては、而向の出来ないやうなことをして行きましたからネ。唯、母が可哀さうです……それを思ふと、母だけには内證でも通信させて遣りたい。Uさんが間に立つて呉れるとも言ひますから。』と

家

斯ういふ甥の話は、三吉の心を木曾川の音のする方へ連れて行つた。舊い橋本の家は、會遊の時のまゝで、未だ彼の眼にあつた。

『變れば變るものさネ。君の家の姉さんのことも、豊世さんのことも、君のことも——何事も達雄さんは知るまいか。ホラ、僕が君の家へ遊ひに行つた時分は、達雄さんも非常に勤勉な人で、君のことなどを酷く心配して居たものですがナ

ア。あの廣い表座敷で、君と僕と、よく種々な話をしましたッけ。あの時分、君が言つたことを、僕はまだ覚えて居ますよ。』

『あの時分は、全然私は夢中でした。』と正太は打消すやうに笑つて、『しかし、叔父さん、私の家を御覽なさい——不思議なことには、代々若い時に家を飛出して居ますよ。第一、祖父さんが左様ですし——阿父が左様です——。』

家

『へえ、君の父親さんの若い時も、矢張許諾を得ないで修業に飛出した方かねえ。』

『私だつても左様でせう——放縦な血が流れて居るんですネ。』

と正太は言つて見たが、祖父の變死、父の行衛などに想ひ到つた時は、妙に笑へなかつた。

やがて庭にある木犀の若葉が輝き初めた。お雪は姪と連立つて、急いで歸つて來

家

た。彼女の袂の中には、娘の好きさうなものが入れてあつた。買物のついでに、ある雜貨店から求めて來た毛糸だ。それをお房に呉れた。

『今し方まで菊ちゃんのお墓に居たものですから、斯様に遅くなりました——延ちゃんと二人でさんく泣いて來ました。』

斯うお雪は夫に言つて、いそくと臺所の方へ行つて働いた。

正太が斯の郊外へ訪ねて來る度に、いつも叔父は仕事々々ていそがしがつて居て、其日のやうにエックリ相手に成つたことはめづらしかつた。夕飯の仕度が出るまで、二人は表の方の小さな部屋へ行つて見た。畠から鋤を昇いて來た農夫、町から戻つて來た植木屋の職人——左様いふ人達は、いづれも一日の勞働を終つて窓の外を通過する。

三吉は窓のところ立つて、シヨンポリと往來の方を眺めながら、

『どうかすると、斯ういふ夕方には寂しくて堪えられないやうなことが有るネー—それが、君、何の理由も無しに。』

『私の今日の境涯では猶更左様です—しかし、叔父さん、左様いふ感じのする時が、一番心は軟かですネ。』

家

斯う正太が答へた。次第に暮れかゝつて來た。その部屋の隅には、薄暗い壁の上
に、別に小窓が切つてあつて、そこから空気を導くやうになつて居る。青白い、
疲れた光線は、人知れずその小障子のところへ映つて居た。正太はそれを夢のや
うに眺めた。

夕飯は雪の手づくりのもので、客と主人とだけ先に済ました。未だ正太は言ひ
たいことがあつて、それを言ひ得ないで居るといふ風であつたが、到頭三吉に向
つて斯う切出した。

家

『實は—今日は叔父さんに御願ひが有つて參りました。』

他事でも無かつた。すこし金を用立て、呉れるといふので有つた。是迄もよく叔
父のところへ、五圓貸せ、十圓貸せ、と言つて來て、樺太行の旅費まで心配させ
たものであつた。

『其様に君は困るんですか。』と三吉は正太の顔を見た。『郷里の方からでも、すこ
し兵糧を取寄せたら可いぢや有りませんか。』

『そこです。』と正太は切ないといふ容子をして、『成るべく郷里へは言つて遣りた
くない。…彼様して、店は店で、若い者が堅めて居て呉れるんですからネ。』

萎れた正太を見ると、何とかして三吉の方では斯の甥の銷沈した意氣を引立たせ
たく思つた。彼はいくらかを正太の前に置いた。それが奈何いふ遣ひ道の金であ
るとも、深く鑿つて聞かなかつた。

やがて正太は自分の下宿を指して歸つて行つた。後で、お雪は臺所の方を濟まして出て来て、夫と一緒に釣洋燈の前に立つた。

『正太さんは、未だ、何事も爲すつていらッしやらないんでせうか。』

『どうも思はしい仕事が無さそうだ。石炭をやつて見たいとか、何とか、来る度に話が變つてる。何卒して早く手足を延ばすやうにして遣りたいものだネ——あの人も、橋本の若旦那として置けば、立派なものだが——』

斯ういふ言葉を交換して置いて、夫婦は同じやうにお房の様子を見に行つた。

家

お房の發熱は幾日となく續いた。庭に向いた部屋へ子供の寢床を敷いて、その枕頭へお雪は藥の罎を運んだ。鞠だの、キシャゴだの、毛絲の巾着だの、それから

娘の好きな人形なども、運んで行つた。お房は靜止して居なかつた。臥たり起きたりした。

ある日、三吉は町から買物して、子供の方へ戻つて來た。父の歸りと聞いて、お房は寢衣のまゝ、床の上に起直つた。そして、家の周圍に元氣よく遊んで居る近所の娘達を羨むやうな様子して、子供らしい眼付で父の方を見た。

家

『房ちゃん、御土産が有るぜ。』

と三吉は美しい色のリボンをそこへ取出した。彼は、食のすまない子供の爲にと思つて、ミルク、フードなども買求めて來た。

『へえ、斯様な好いのを父さんに買つて頂いたの。』

とお雪もそこへ來て言つて、そのリボンを子供に結んで見せた。

『房ちゃんは何か食べたかネ。』と三吉は妻に尋ねた。

『お晝飯に、お粥をホンのぼつちり——牛乳は厭だつて飲みませんし——眞實に、何物も食へたがらないのが一番心配です。』

『ねえ、房ちゃん、御醫者様の言ふことを聞いて、早く快く成らうねえ。左様すると、父さんが房ちゃんに好く似合ふやうな袴を買つて呉れるよ。』
斯う父に言はれて、お房は唯黙頭いた。やがて復に横に成つた。

家

『あゝ、父さんも疲れた。』と三吉は子供の側へ身體を投出すやうにした。『菊ちゃんが居なくなつて、急に家の内が寂しく成つたネ。ホラ、父さんが仕事をしする時、机の前に二人並べて置いて、「父さんが好きか、母さんが好きか」と聞くと、房ちゃんは直に「父さん」と言ふし——菊ちゃんの方は暫時考へて居て、「父さんと母さんと両方」だトサ——あれで、菊ちゃんも、ナカ／＼外交家だつたネ。』
『何方が外交家だか知れやしない。』とお雪は軽く笑つた。

病兒を慰めやうとして、三吉は種々なことを持出した。山に居る頃はお房もよく歌つた兎の歌のことや、それからあの山の上の家で、居睡してはよく叱られた下婢が蛙の話をしたことなどを言出した。七年の長い田舎生活の間、あの石垣の多い傾斜の方で、毎年のやうに旅の思をさせた蛙の聲は、まだ三吉の耳にあつた。それを子供に眞似て聞かせた。

家

『ヒヨイ／＼／＼／＼……グツ／＼……グツ／＼……』

とお房は寝ながら父の方を見て言つた。自然と出て來た微笑は僅かに其口唇に上つた。

『房ちゃん、母さんが好い物を造へて來ましたよ——すこし飲んで見てお呉れな。』とお雪は夫が買つて來たミルク、フツドを茶碗に溶かして、匙を添えて持つて來

た。子供は香ばしそうな飲料を一寸味つたばかりで、餘は口を着けやうともしなかつた。其晩から、お房は一層激しい發熱の状態に陥つた。何となく斯の兒の身體には異狀が起つて來た。

『眞實に、申談ぢや無いぜ。』

と三吉は物に製はれるやうな眼付をして、いかにしてもお房ばかりは救ひたいといふことを妻に話した。不思議な恐怖は三吉の身體を通過した。お雪も碌に眠られなかつた。

家

翌々日、お房は病院の方へ送られることに成つた。病み震へて居る娘を抱起すやうにして、母は汚れた寢衣を脱がせた。そして、山を下りる時に着せて連れて來たヨソイキの着物の筒袖へ、お房の手を通させた。

『まあ、斯様に熱いんですよ。』

とお雪が言ふので、三吉はコソコソ子供に觸つて見た。お房の身體は火のやうに熱かつた。

『病院へ行つて御醫者様に診て頂くだよ——シツカリしてあげてよ。』と三吉は娘を勵ました。

『母さん……前髪をとつて頂戴な。』

家

熱があつても、お房は斯様なことを願つて、リボンで髪を束ねて貰つた。

頼んで置いた車が來た。先づお雪が乗つた。娘は、父に抱かれながら門の外へ出て、母の手に渡された。下婢は乳呑兒の種夫を連れて、これも車で其後に隨つた。

『延、叔父さんも是から行つて見て來るからネ、お前に留守居を頼むよ。』

斯う三吉は姪に言ひ置いて、電車で病院の方へ廻ることにした。慌しさに彼は家を出て行つた。

家

留守には、親類の人達、近く郊外に住む友人などが、かはるく見舞に來た。『お延ちゃん、お淋しいでせうねえ』と庭傳ひに來て言つて、娘を慰める小學校の女教師もあつた。子供の病が重いと聞いて、お雪は言ふに及ばず、三吉まで病院を離れないやうに成つてからは、二番目の兄の森彦が泊りに來た。森彦は夕方來て、朝自分の旅舎へ歸つた。

相變らず家の内はシンカンとして居た。道路を隔て、向側の農家の方で鳴く鶏の聲は、午後の空気に響き渡つた。強い、充實した、肥つた體軀に羽織袴を着け、紳士風の帽子を冠つた人が、門の前に立つた。この人が森彦だ——お延の父だ。其日は、お房が入院してから一週間餘に成るので、森彦も病院へ見舞に寄つて、

例刻よりは早く自分の娘の方へ來た。

『阿父さん。』

とお延は出て迎へた。

郷里を出て長いこと旅舎生活をする森彦の身には、斯うして娘と一緒に成るのがめづらしくも有つた。傍へ呼んで、病院の方の噂などをする娘の話振を聞いて見た。田舎から來てまだ間も無いお延が、都會の娘のやうに話せないもの無理はない、などと思つた。

家

『奈何だね、お前の頭腦の具合は——此頃もこの叔父さんが、どうも延は具合が悪いやうだから、暫時學校を休ませて見るなんて言つた——其様な勇氣の無いこつちや、マチカン。』

思はず森彦は郷里の方の言葉を出した。そして、舊家の家長らしい威嚴を帯びた

調子で、博愛、忍耐、節儉などの人としての美德であることを語り聞かせた。久しく森彦の傍に居なかつたお延は、何となく父を憚るといふ風で、唯黙つて聞いて居た。

『や、菓子を呉れるのを忘れた。』

と森彦は思付いたやうに笑つて、袂の内から紙の包を取出した。やがて、家の内を眺め廻しながら、

家

『どうもこの家は空氣の流通が好くない。此頃から俺は左様思つて居た。それに、この叔父さんのやうに彼様煙草をポカ／＼燻したんぢや……俺などは、毎晩休む時に、旅舎の二階を一度明けて、すつかり悪い空氣を追出してから寝る。すこしでも煙草の煙が籠つて居やうものなら、もう俺は寝られんよ。』
斯うお延に話した。彼は娘から小刀を借りて、部屋々々の障子の上の部分ですこ

しづ／＼切り透した。

『延——それぢや俺はこれで歸るがねえ。』

『あれ、阿父さんは最早御歸りに成るかなし。』

『今日は叔父さんも一寸歸つて来るそうだし——左様すれば俺は居なくても済む。丁度好都合だつた。これからもう一軒寄つて行くところが有る。復た泊りに來ます。』

家

家の方を案じて、三吉は夕方に病院から戻つた。留守中、訪ねて來て呉れた人達のことを姪から聞取つた。

『只今。』

と三吉は縁側のところへ出て呼んだ。

『オヤ、小泉さん、御歸りて御座いましたか。』

庭を隔て、對ひ合つて居る裏の家からは、女教師の答へる聲が聞えた。

女教師は自分の家の格子戸をガタ／＼言はせて出た。井戸の側から、竹の垣を廻つて、庭傳ひに三吉の居る方へやつて來た。中學へ通ふ位の子息のある年配で、ハッキリ／＼と丁寧な物なぞも言ふ人である。

家

『房子さんは奈何ていらつしやいますか。先日一寸御見舞に伺ひました時も、大層御悪いやうな御様子でしたか——眞實に、私は御氣の毒で、房子さんの苦しむところを見て居られませんでしたよ。』

斯う女教師は庭に立つて、何處か國訛のある調子で言つた。其時三吉は、簡單にお房の病氣の經過を話して、到底助かる見込は無いらしいと歎息した。お延も縁

側に出て、二人の話に耳を傾けた。

『もし萬一のことでも有りそうでしたら、病院から電報を打つ……醫者が左様言つて呉れるものですから、私もよく頼んで置いて、一寸用達にやつて參りました。』と三吉は附添した。

家

『まあ、貴方のところでは、奈何して斯様に御子さん達が……必と御越に成る方角でも悪かつたんでせうって、大屋さんの祖母さんが左様申しますんですよ。其様なことも御座いますまいけれど……でも、僅か一年ばかりの間に、皆さんが皆さん——奈何考へましても、私などには解りません。』と言つて、女教師は思ひやるやうに、『あのまあ房子さんが、病院中へ纏けるやうな聲を御出しなすつて、『母さん——母さん——』と呼んでいらつしやいましたが、母さんの身に成つたら奈様で御座いませう……左様申して、御座をして居りますんですよ。』

『一週間、彼様して呼び續けに呼んで居ました——最早あの聲も弱つて來ました。』と三吉は答へた。

女教師が歸つて行く頃は、植木屋の草屋根と暗い松の葉との間を通して、遠く黄に輝く空が映つた。三吉は庭に出た。子供のことを案じながら、あちこちと歩いて見た。

家

夕飯の後、三吉は姪に向つて、

『延、叔父さんは斯の一週間ばかり碌に眠らないんだからネ……今夜は叔父さんを休ませてお呉れ。お前も、頭腦の具合が悪いやうなら、早く御休み。』

斯う言つて置いて、其晩は早く寢床に就いた。

何時電報が掛つて來るか知れないといふ心配は、容易に三吉を眠らせなかつた。身體に附いて離れないやうな病院特別な匂ひが、ブーンと彼の鼻の先へ香つて來

家

た。その匂ひは、何時の間にか、彼の心をお房の方へ連れて行いた。電燈がある。寢臺がある。子供の枕頭へは黒い布を掛けて、光の刺激を避けるやうにしてある。その側には、妻が居る。附添の女が居る。種夫や下婢も居る。白い制服を着た看護婦は病室を出たり入つたりして居る。未だお房は、子供ながらに出せるだけの精力を出して、小さな頭腦の内部が破壊れ盡すまでは休めないかのやうに叫んで居る——思ひ疲れて居るうちに、三吉は深いところへ陥入るやうに眠つた。

翌日は、午前に三吉が留守居をして、午後からお延が留守居をした。

『叔母さん達のやうに、彼様して子供の側に附いて居られると可いけれど——叔父さんは、お前、お金の心配もしなけりや成らん。』

斯様なことを言つて出て行つた三吉は、やがて用達から戻つて來て、復た部屋に

倒れた。何時の間にか、彼は死んだ人のやうに成つた。

『母さん——』

斯ういふ呼聲に気が付いて、三吉が我に返つた頃は、遅かつた。彼は夕飯後、しばらく姪と病院の方の噂をして、其晩も早く寢床に入つたが、自分で何時間ほど眠つたかといふことは知らなかつた。次の部屋には、姪がよく寢入つて居る。身體を動かさずに居ると、可恐しい子供の呼聲が耳の底の方で聞える。『母さん、母さん、母さん——母さんちゃん——ちゃん——ちゃん——ちゃん』宛然、氣が狂つたやうな聲だ……それは三吉の耳について了つて、何處に居ても頭腦へ響けるやうに聞えた。

夢のやうに、門を叩く音がした。

『小泉さん、電報!』

家

むつくと三吉は跳起きた。表の戸を門けて、受取つて見ると、病院から打つて寄したもので、『ミヤクハゲシ、スグコイ』とある。お延を起す爲に、三吉は姪の寢て居る方へ行つた。斯の娘は一度『ハイ』と返事をして、復た寢て了つた。

『オイ、オイ、病院から電報が来たよ。』

家

『あれ、眞實かなし。』とお延は田舎訛で言つて、床の上に起直つた。『私は夢でも見たかと思つた。』

『叔父さんは直に仕度をして出掛る。氣の毒だが、お前、車屋まで行つて来てお呉れ。』

と叔父に言はれて、お延は眼を擦りくく出て行つた。

三吉が家の外に出て、車を待つ頃は、まだ電車は有るらしかつた。稲荷祭の晩で、新橋の方の空は明るい。遠く犬の吠える聲も聞える。そのうちに車が来た。三吉

は新宿まで乗つて、それから電車で行くことにした。

『延、お前は獨りで大丈夫かネ。』

と三吉は留守を頼んで置いて出掛けた。お延は戸を閉めて入つた。冷い寢床へ潜り込んでからも、種々なことを小さな胸に想像して見た時は、この娘もふるく震へた。叔父が新宿あたりへ行き着いたかと思はれる頃には、ポツ／＼板屋根の上へ雨の來る音がした。

家

復た家の内は寂寞に返つた。

車が門の前で停つた。正太はそれから飛降りて、閉めてあつた扉を押した。『延ちゃん、皆な歸つて來ましたよ。』正太が入口の格子戸を開けて呼んだ。それを聞き

つけて、お延は周章てゝ出た。丁度森彦も來合せて居て、そこへ顔を顯はした。

『到頭房もいけなかつたかい。』

『え、今朝、拂曉に息を引取つたそうです……皆な、今、そこへ來ます。』

森彦と正太とは、斯う言合つて、互に顔を見合せた。

間もなく三臺の車が停つた。お雪は乳呑兒を抱いて二週間で自分の家へ歸つて來た。下婢も荷物と一緒に車を降りた。つゞいて、三吉が一番年長の兄の娘、お

俊も、降りた。

三吉の車は一番後に成つた。日の映つた往來には、お房の遊友達が立留つて、さゝやき合つたり、眺めたりして居た。黒い幌を掛けて静かに引いて來た車は、その娘達の見て居る前で停つた。

『叔父さん、手傳ひませうか。』

と正太が車の側へ寄つた。

お房は茶色の肩掛に包まれたまゝ、父の手に抱かれて來た。グタリとした子供の死體を、三吉は車から抱下して、門の内へ運んだ。

佛壇のある中の部屋の隅には、人々が集つて、お房の爲に床を用意した。そこへ冷くなつた子供を寝かした。顔は白い布で掩ふた。

家 『ホウ、斯うして見ると、思ひの外大きなものだ……奈何だネ、膝は曲げて遣らなくても好からうか。』と森彦が注意した。

『子供のことですから、このまゝで棺に納まりませう。』と正太は眺めた。

『でも、すこし曲げて置いた方が好いかも知れません。』

斯う三吉は言つて見て、娘の膝を立てるやうにさせた。氷のやうなお房の足は最早自由に成らなかつた。それを無理に折曲げた。お俊やお延は、水だの花だのを

枕頭へ運んだ。丁度、お雪が二番目の妹のお愛も、学校の寄宿舎から訪ねて來た。斯の娘は姉の傍へ寄つて、一緒に成つて泣いた。

午後には、裏の女教師が勝手口から上つて、子供の死顔を見に來た。

『眞實に、何とも申上げやうが御座いません……小泉さんは、まだそれでも男だから宜う御座んすが、こちらの叔母さんが可哀さうです。』と女教師は言つた。

家

お房が病んだ熱は、腸から來たもので無くて、實際腦膜炎の爲であつた。それを

お雪は女教師に話し聞かせた。白癡兒として生き残るよりは、あるひは斯の方が勝かも知れない、と人々は言合つた。

黄色く日中に燃る蠟燭の火を眺めながら、三吉は窓に近い壁のところ倚凭つて居た。

『叔父さん、お疲れてせう。』と正太は三吉の前に立つた。

『なにしろ、君、初の一週間は助けたいく／＼で夜も碌に眠らないでせう。後の一週間は、子供の側に居るのもこれぎりか、なんと思つて復た起きてる……終には、半分眠りながら看護をして居ましたよ。すこし身體を横にしやうものなら、直にもう死んだやうに成つて了つて……』

『私なども、どうかすると豊世に子供でも有つたら、と左様思ふことも有ります。が、しかし叔父さんや叔母さんの苦むところを見て居ますと、無い方が好いかとも思ひますネ。』

家

『正太さん、煙草を持ちませんか。有るなら一本呉れ給へな。』

正太は袂を探つた。三吉は甥が呉れた巻煙草に火を點けて、それをウマさうに燻して見た。葬式の準備やら、弔辭を言ひに来る人が有るやらで、家の内は混雑した。三吉は器械のやうに起つたり坐つたりした。

葬式の日、親類一同、小さな棺の周圍に集つた。三吉が往時書生をして居た家の直樹も来た。斯の子息は疾に中學を卒業して、最早少壯な會社員であつた。お俊も来た。

家

『叔父さん、今日は吾家の阿父さんも伺ふ筈なんですが……伺ひませんかからって、私が名代に参りました。』とお俊は三吉に向つて、父の實が謹慎中の身の上であることを、それとなく言つた。

其日は、お愛も長い紫の袴を着けて来た。斯うして東京に居る近い親類を見渡したところ、實を除いての年長者は、さしあたり森彦だ。森彦は、若い人達の發達に驚くといふ風で、今では學校の高等科に居るお俊や、優美な服装をしたお愛などに、自分の娘を見比べた。

正太は花を買ひ集めて来た。眠るやうなお房の顔の周圍はその花で飾られた。』お

雪、房ちゃんの玩具は一緒にに入れて遣らうぢやないか」と三吉が言へば、「左様です、有ると反つて思出して不可、」と正太も言つて、毬だの巾着だのを棺の隅々へ入れた。

『餘程毛絲が氣に入つたものと見えて、眼が見えなく成つても、未だ毛絲のことを言つて居ました。』とお雪は、病院に居る間子供に買つて呉れた物を取出した。

家

『それも入れて遣れ。』

一切が葬られた。やがてお房は二人の妹の墓の方へ送られた。お雪は門の外へ出て、小さな棺の分らなくなる迄も見送つた。『最早お房は居ない。』斯う思つて、若葉の起びた金目垣の側に立つた時は、母らしい涙が流れて來た。お雪は家の内へ入つて、泣いた。

家

山から持つて來た三吉の仕事は意外な反響を世間に傳へた。彼の家では、急に客が殖えた。訪ねて來る友達も多かつた。しかし、主人は居るか居ないか分らないほどヒツソリとして、どうかすると表の門まで閉めたまゝにして置くことも有つた。

三吉は最早、子供などは奈何でも可いと言ふことの出來ない人であつた。多くの困難を排しても進まうとした努力が、奈何して斯様な悲哀の種に成るだらう、と彼の眼が言ふやうに見えた。『彼處に子供が三人居るんだ。』——斯の思想に導かれて、幾度か彼の足は小さな墓の方へ向いた。家から墓地へ通ふ平坦な道路の兩側には、すでに新緑も深かつた。到る處の郊外の日あたりに、彼は自分の心によく似た憂鬱な色を見つけた。しかし彼は、寺の周圍を彷徨つて來るだけで、三つ並

んだ小さな墓を見るに堪えなかつた。それを無理にも行かうとすれば、頭腦がクワツと逆上せて、急に倒れかゝりそうな激しい眩暈を感じた。いつでも寺の前まで行きかけては、途中から引返した。

『父さんは薄情だ。子供の墓へ御参りもしないで……』
とお雪はよくそれを言つた。

家

寄ると觸ると、家では子供の話が出た。何時の間にか三吉の心も、家のもの話の方へ行つた。

お雪は姪をつかまへて、夫の傍で種夫に乳を吞ませながら、

『繁ちゃんの亡くなつた時は、まだ房ちゃんは何事も知りませんでしたよ。でも、菊ちゃんの時には最早よく解つて居ましたッけ——あの時は皆な一緒に泣きましたもの。』

『なアし。』とお延も思出したやうに、『あれを思ふと、房ちゃんが眼に見えるやうだ。』

家

『眞實に、繁ちゃんの時は皆な夢中でしたよ——私が「御覽なさいな、繁ちゃんは、サンに成つたんぢや有りませんか。」と言へば、房ちゃんと菊ちゃんとも平氣な顔して、「死んぢやつたのよ、死んぢやつたのよ、」と言ひ乍ら、棺の周圍を踊つて歩きましたよ。そして、死んだ子供の側へ行つて、噴飯すんですもの。』
『まあ。』

『しかし、二人とも達者で居る時分には、よく繁ちゃんの御墓へ連れて行つて、桑の實を摘つて遣りましたッけ。繁ちゃんの桑の實だからッて教えて置いたもんですから、行くと——繁ちゃん桑の實頂戴ッて断るんですよ。左様しちやあ、二人て頂くんです……あの御墓の後方にある桑の樹は、背が高くてせう。だもんで

すから、母さん摘つて下さいって言つちやあ……』

『オイ、何か他の話にしやうぢやないか。』

と三吉が遮つた。子供の話が出ると、必と終には三吉が斯う言出した。

『種ちやん。』お延はアヤすやうに呼んだ。

『斯の子は又、奈何して斯様に弱いでせう。』とお雪は種夫の顔を熟視りながら言つた。

家

蹂躪されるやうな目付をして、三吉も種夫の方を見た。其時、夫婦は顔を見合せた。『ひよツとかすると、斯の兒も？』斯の無言の恐怖が互の胸に傳はつた。三人の娘達を見た目で弱い種夫を眺めると、十分な發育さへも氣遣はれた。

急に日が強く映つて來た。すこし濕つた庭土は、熱い、黄ばんだ色を帯びた。木犀の葉影もハッキリと地にあつた。三吉は帽子を手にして、そこいらを散歩して

來ると言つて、出て行つた。

『左様言へば、繁ちやんの肉體は最早腐つて了つたんでせうねえ。』

とお雪は姪に言つて、歎息した。彼女は乳呑兒を抱きながら縁側のところへ出て

眺めた。日光は輝いたり、薄れたりするやうな日であつた。お延は庭へ下りた。

葦の唱歌を歌ひ出した。それはお房やお菊が未だピン／＼して居る時分に、二人

家

して家の周囲をよく歌つて歩いたものである。お雪は、死んだ娘の聲を探すやうな眼付して、一緒に低い聲で歌つて見た。勝手口の方でも調子を合せる聲が起つた。

夕方に三吉はボンヤリ歸つて來た。

『何だか俺は氣でも狂ひそらに成つて來た。一寸磯邊まで行つて來る。』
斯う家のものに話した。其晩、急に彼は旅行を思ひ立つた。そして、そこ／＼に

仕度しどを始めた。山やまにある友人ゆうじんの牧野まきのからは休やすみに来こい〜と言いつて寄よすが、其時そのときは唯一人たひひとりで、世間せけんを忘わすれるやうなところへ行いきたかつた。翌朝よくあさ早く、彼かれは磯邊いそべの温泉宿おんせんやどを指さして發たつて行いつた。

家

『あれ、叔父おぢさんは最早もとも歸かへつて御出おいでたそうな。』
とお延のぶは入口いりぐちの庭にはに立たつて言いつた。

お雪ゆきが生家まことの方ほうで老祖母おばあさんの死し去きょしたといふ報知しらせは、旅たびにある三吉きちを驚おどろかした。二三日にちしか彼かれは磯邊いそべに逗留とらりしなかつた。電報でんぱうを受取うけとると直すぐ急いそいで家うちの方ほうへ引返ひかへして來きた。

『種たねちゃん、父ちちさんの御歸おかへりだよ。』とお雪ゆきも乳呑兒ちのみこを抱だきながら、夫おつとを迎むかへた。

『よく、斯様せん様に早く歸かへられましたネ、皆みなな貴方あなたのことを心配しんぱいしましたよ。』

『道理だうりで、森彦もりひこさんからも見舞みまいの電報でんぱうを寄よした。どうも變へんだと思おもつた——俺おれは又また、お前まへの方ほうを案あんじて居ゐた。』

ホツと溜息ためいきを吐ついて三吉きちは老祖母おばあさんの話はなしに移うつつた。

家

この老祖母おばあさんの死しは、今更いまさらのやうに名倉なぐらの大きな家族かぞのことを思おもはせた。別べつに寵かまどを持もつた孫娘まごむすめだけでも二人ふたりある。また修業中しゆげふちゆうの孫まごから、多勢おほぜいの曾孫ひいまごを加くへたら、餘程ほどの人数にんずに成なる。お雪ゆきばかりは、その中なかでも、遠とほく嫁かたづいて來きた方ほうであるが、斯この葬式お葬しは是非ぜひとも見送みおくりたかつた。三吉きちは又また、種夫たねぞうに下婢せんばを附つけて一しよ緒ごに遣やるつもりで歸かへつて來きた。

473 『さあ、今度こんどはお前まへが出掛でかける番ばんだ。』と三吉きちが言いつた。『でも、俺おれの仕事しごとが濟すんだ後あとで好よかつた……買かふ物ものがあつたら買かつたら可よからう。何か土産みやげも用意よういして行いか

んけりや成るまゝ。』

『土産なんか要りません。一々持つて行つた日にや大變です。』

お雪は妹だの、姪だのを數へて見た。

久し振て生家へ歸る妻の爲にと思つて、三吉は名倉の娘達の許へ何か荷物に成らない物を見立てやうとした。旅費を用意したり、買物したりして、夫が町から戻つて來る頃は、妻は旅仕度に忙しかつた。

家

あわたしい中にも、種々なことがお雪の胸の中を往來した。長い年月の間、夫と艱難を共にした後で、彼女は自分の生家を見に行く人である。今迄殆んど出なかつた家を出、遠く夫を離れて、両親や姉妹やそれから友達など、一緒に成りに行く人である。光る帆、動搖する波、鷗の鳴聲……可憐しいものは故郷の海ばかりでは無かつた。曾て、彼女が心を許した勉——その人を自分の妹の夫としても

見に行く人である。

『叔母さん、御郷里へ御歸り……御取込のところですよ。』

斯う言つて、翌朝正太が訪ねて來た頃は、手荷物だの、子供の着物だの、部屋中ごちやく、散亂してあつた。

『正太さん、御免なさいまし。』とお雪は帯を締めながら挨拶した。

家

『どれ、子供をこゝへ連れて來て見な。』

と三吉に言はれて、下婢はそこに寝かしてあつた種夫を抱いて來た。

『餘程氣をつけて連れて行かないと、不可せ。』

『よく彼様して温順しく寝て居たものだ。』と正太も言つた。

『まだ、君、毎日洗腸してますよ。左様しなけりや通じが無い……玩具でも宛行つて置かうものなら、半日でも黙つて寝て居ます。房ちやん達から見ると、ずつ

と斯の兒は弱5。』

『これ御郷里の方へでも連れていらしたたら、また壯健に成るかも知れませ
ん。』

『まあ、一夏も向に居て来るんです。』

『眞實に叔母さんも御苦勞様——女の旅は容易ぢや有りませんネ。』

家

お雪は二人の話を聞きながら、白足袋を穿いた。『私が留守に成つたら、父さんも
困るでせうから、お俊ちゃんにでも来て居て頂くつもりです。』と彼女は言つた。
そのうちに仕度が出来た。お雪は夫や正太と一緒に旅立の茶を飲んだ。

『種ちゃんにも、一ぱい飲まして。』

とお雪は懐をひろげて、暗い色の乳首を子供の口へ宛行つた。お延は車宿を指
して走つて行つた。

家

甥に留守を頼んで置いて、一寸三吉は新宿の停車場まで妻子を送りに行つた。歸
つて見ると、正太は用事ありげに叔父を待受けた居た。

『正太さん、君はまだ朝飯前ぢやなかつたんですか。僕は言ふのを忘れた。』

『え、早く済まして來ました。』

『めづらしいネ。』

『私のやうな寢坊ですけれど、めづらしく早く起きました。下宿の膳に對つて、
つく／＼今朝は考へました……なにしろ一年の餘にも成るのに、未だ斯うしてブ
ラ／＼して居るんですからネ……』

正太は激昂するやうに笑つた。暗い前途にいくらかの明りを見つけたと言出した。

其時彼は叔父の思惑を憚るといふ風であつたが、やゝ躊躇した後で、自分の行くべき道は兜町の方角より外に無い——尤も、これは再三再四熟考した上のこと、いよく相揚師として立たうと決心した、と言出した。

何か冒険談でも聞くやうに、しばらく三吉は正太の話に耳を傾けて居たが、やがて甥の顔を眺めて、

家

『しかし君、——實さんにせよ、森彦さんにせよ、皆な儲けやうといふ人達でせう。左様ないふ人達が揃つて居ても、容易に儲けられない世の中ぢや有りませんか。兜町へ入つたからつて、必ず儲かるとは限りませんぜ。』

『實叔父さん達と、私とは、時代が違ひます。』と正太は力を入れた。

『まあ僕のやうな門外漢から見ると、商賣なり何なりに重きを置いてサ、それから儲けて出るといふのが、實際の順序かと思ふネ。名倉の阿爺を見給へ。あの人は事業をした。そして、儲けた。どうも君等のは儲けることばかり先に考へて掛つてるやうだ……だから相場なんて方に思想が向いて行くんぢや有りませんか。』

『そこです。私は相場を事業として行ります。一寸手を出して見て、直ぐまた止めて了ふなんて、そんな行き方をする位なら、初から私は関係しません……先づ店員にでも成つて、それから出發するんです……私は兜町に骨を埋める覺悟です……』

家

『それほどの決心があるなら、君の思ふやうに行つて見るサ。僕は君、何でも行りたか行れといふ流儀だ。』

『左様叔父さんに言つて頂くと、私も難有い——森彦叔父さんなどは何と言ふか知らないが……』

森彦の方へ行けば森彦のやうに考へ、三吉の許へ来れば三吉のやうに考へるのが、

正太の癖であつた。丁度、斯の植木屋の地内に住む女教師の夫といふは、兜町方面に明るい人である。で、正太は話を進めて叔父からその人に口を利いて貰ふやうに、斯う頼んだ。

何となく不安な空気を残して置いて、甥は歸つて行つた。『正太さんも本氣で行る積りかナア、』と三吉は言つて見て、兎に角甥のために、頼めるだけのことは頼まうと思つた。其日の午後、三吉は庭傳ひに女教師の家の横を廻つて、澤山盆栽鉢の置並へてあるところへ出た。植木屋の庭の一部は、やがて女教師の家の庭であつた。子息の中學生は三脚椅子に腰掛けて、何かしきりと寫生して居た。

女教師の旦那といふは、官吏生活もしたことの有るらしい人で、今では兜町に隠れて、手堅くある店を勤めて居た。三吉は一ぱい物の散亂してある縁側のところへ行つて、斯の阿爺さんとも言ひたい年配の人の前に立つた。

家

『ア、左様ですか。宜しい。承知しました。』と女教師の旦那は、心易い調子で、三吉から種々聞取つた後で言つた。『橋本さんなら、私も御見掛申して知つて居ます。御年齢は何歳位かナ。』

『私より三つ年少です。』

『む、未だ御若い。これから働き盛りといふところだ。御氣質は奈様な方ですか——そこも伺つて置きたい。』

『左様ですナア。彼様して今では浪人して居ますが、一體華美なことの好きな方です。』

家

『それてなくツちや不可——相場師にても成らうといふ者は、人間が派手でなくちや駄目です。では、私の許まで簡単な履歴書をよこして下さい。宜し。』
『心當りを問合はて見ませう。』

女教師の旦那は引受けて呉れた。

甥のことを頼んで置いて、自分の家へ引返してから、三吉は不取敢正太へ宛て、書いた。其時は姪のお延と二人ざりであつた。

『叔母さん達も、最早餘程行つたわなアし。』とお延は、叔父の傍へ来て、旅の人の達の噓をした。

家

『斯様な機會でもなければ、叔母さんだつて置いて行かれるもんぢやない——今度出掛けたのは、叔母さんの爲にも好い。』

斯う三吉は姪に言ひ聞かせた。彼は、自分でも、何卒して子を失つた悲哀を忘れたいと思つた。

家

諸方の學校が夏休に成る頃、お俊は叔父の家を指して急いで來た。妹のお鶴も姉に隨つて來た。叔父が家の向側には、農家の垣根のところ、高く枝を垂れた百日紅の樹があつた。熱い、紅い、寂しい花は往來の方へ向つて咲いて居た。お俊は妹と一緒に格子戸を開けて入つた。

『あら、お俊姉さま——』

とお延は飛立つやうに喜んで迎へた。お俊姉妹と聞いて、三吉も奥の方から出て

来たの

「叔父さん。もつと早く御手傳ひに伺ふ筈でしたが、つい學校の方がいそがしかつたもんですから——」とお俊が言つた。「延ちゃん一人で、さぞ御困りでしたらう。」

「眞實に、鶴ちゃんもよく来て下さつた。」とお延は嬉しうに。

家

「今日は一緒に連れて参りました、學校が御休だもんですから。」

「へえ、鶴ちゃんの方は未だ有るのかい。」と三吉が聞いた。

「この娘の學校は御休が短いんです……あの、吾家の阿父さんからも叔父さんに宜敷……」

「お俊姉さまが来て下さつたんで、眞實に私は嬉しい。」とお延はそれを繰返し言つた。

長い長い留守居の後で、お俊姉妹は漸く父の實と一緒に成れたのである。斯の二人の娘は叔父達の力と、母お倉の遺練とで、僅かに保護されて来たやうなものであつた。三吉がはじめて家を持つ時分は、まだお俊は小學校を卒業したばかりの年頃であつた。それが斯うして手傳ひなどに來るやうに成つた。お俊は幾年振かて叔父の側に一夏を送りに來た。

家

「鶴ちゃん、お裏の方へ行つて見ていらつしやい。」とお俊が言つた。

「鶴ちゃんも大きく成つたネ。」

「彼様に着物が短く成つちやつて——もうズン／＼成長するんですもの。」

お鶴はキマリ悪さうにして、笑ひながら庭の方へ下りて行つた。

「俊、お前のとこの阿父さんは何してるかい。」

「まだ何事もして居ません……でも、朝などは、それは早いですよ。今迄家の

ものにサンク、苦勞させたから、今度は乃公が勸めるんだなんて、阿父さんが暗いうちから起きてお釜の下を焚付けて下さるんです……習慣に成つちやつて、奈何しても寝て居られないんです……阿母さんか起出す時分には、御味噌汁までちやんと出来てます……』

『それを思ふと氣の毒でもあるナ。』

家

『阿母さん一人の時分には、家の内だつて左様關はなかつたんですけれど、阿父さんが歸つていらしたら、何時の間にか綺麗に片付いまいました——妙なもののねえ。』

庭の方で笑ひ叫ぶ聲がした。お鶴は滑つて轉んだ。お延は駈出して行つた。お俊も笑ひながら、妹の着物に附いた泥を落してやりに行つた。

其晩、三吉の家では、めづらしく賑かな唱歌が起つた。娘達は楽しい夏の夜を送

る爲に集つた。暗い庭の方へ向いた部屋には、叔父か冷しい夜風の吹入るところを選んで、獨り横に成つて居た。叔父は別に燈火も要らないと言ふので、三人の姪の居るところだけ明るい。一つにして隅の方に置いた洋燈の光は、お鶴が白い單衣だの、お俊が薄紅い帯だのに映つた。

『鶴ちゃん、叔父さんに遊戯をしてお見せなさいよ。』とお俊がすゝめた。

家

『何にしませう……』とお鶴は考へて、『もし〜龜よにしませうか。』

『浦島が好いわ。』

舊い小泉の家——その頽廢と零落との中から、若草のやうに成長した娘達は、叔父に聞かせやうとして一緒に唱歌を歌ひ出した。お鶴は編み下げた髪のリボン往直して、短い着物の皺を延しながら起立つた。姉や従姉妹が歌ふ種々な唱歌につれて、斯の娘は部屋の内を踊つて遊んだ。

三吉は縁側の方から眺めながら、

『ウマイ、ウマイ——何か、御褒美を出さんけりや成るまい。』

『鶴ちゃん、もう澤山よ。』

と姉に言はれても、妹は遊戯に夢中に成つた。一つや二つでは聞入れなかつた。

家

一晩泊つてお鶴は歸つて行つた。翌日から勝手の方では、若々しい笑聲が絶えなかつた。四五日降つたり晴れたりした後で、烈しい朝日が射して來た。暑く成らないうちに、と思つて、お俊は井戸端へ盥を持出した。お延も手桶を提げて、竹の垣を廻つた。長い袖をまくつて、洗濯物を始めたお俊の側には、お延が立つて井戸の水を汲んだ。

『あゝ、今日は朝から身體が莖莖のやうに成つちやつた。午勞のやうにピンとして歩けん——』

斯様なことをお延が言つて、年長の従姉妹を笑はせた。お俊は釣瓶の水を分けて貰つて復たジャブ〜洗つた。

庭には物を乾す餘地が可成廣くあつた。やがてお俊は洗濯した着物を長い竿に通して、それを高く揚げた。

家

『うれしい！』

思はず彼女は叫んだ。お延は立つて眺めて居た。

『学校の先生が、夏休の間に考へていらッしやいといふ問題を、ひよいと思出してよ。』

斯うお俊が話し聞かせて、お延と一緒に勝手口から上つた。二人は意味もなく起

つて来る微笑を交換した。互に、濡れた、あらはな手を拭いた。

空は青い海のやうに光つた。イヤといふほど照りつけて来た日光は、白い干物に反射して、家の内に満ち溢れた。午後から、娘達は思ひくの場所を選んで足を投出したり、柱に倚凭つたりした。三吉は、南の窓に近く、ハンモックを釣つた。そこへ蒸されるやうな體軀を載せた。熱い地の息と、冷しい風とが妙に混り合つて、窓を通して入つて来る。單調な蟬の歌は何時の間にか彼の耳を疲れさせた。憂鬱な眼付をして、三吉が晝寝から覺めた時は、此にでも刺されたらしい疼痛を覺えた。お俊は髪に塗る油を持って来て、それを叔父に勧めた。

『延ちゃん——まあ、来て御覽なさいよ。』とお俊が笑ひながら呼んだ。『三吉叔父さんは斯様に白髪が生えてよ。』
お延は勝手の方から手を振つてやつて来た。

『オイ、オイ。』と三吉は自分の子供にても戯れるやうに言つた。『左様お前達のやうに馬鹿にしちや困るぜ……これでも叔父さんは金鵝勳章の積りだ。』

『あんな負惜みを言つて。』とお延は譯も無しに笑つた。

『ねえ、延ちゃん、有れば仕方が無いわ。』と言つて、お俊は叔父の傍へ寄つて、『叔父さん、ジツとしていらッしやい——抜いて進ませせうネ。前の方はそんなでも無いけれど、鬢のところなどは、一ぱい……こりや大變だ……容易に取盡せやしな。』

お俊は叔父の髪に觸れて、一本々々擇り分けた。凋落を思はせるやうな、白い、光つたやつが、どうかすると黒い毛と一緒に成つて抜けて来た。

『叔父さん、奈何して斯様に髪がこわれるんでせう。』
 勝手の方から来たお俊は、叔父の傍へ寄つて、親しげな調子で言つた。斯の姪は
 三吉を頼りにするといふ風で、子が親に言ふやうなことで話して聞かせやうと
 した。

『どうして夏は斯様に——』

家

と復たお俊は言つて、うしろむきに身を斜にして見せた。彼女は、乾きくづれた
 束髪（きんぱう）の根を掴んで、それを叔父に動かして見せたりなぞした。
 庭（にわ）の洗濯物（せんたくもの）も乾いた。二人の姪は屋外に出て着物や繻絆（じゆばん）を取込みながら、互に唱
 歌（うた）を歌つた。斯の半分夢中で合唱して居るやうな、何となく生氣（せいき）のある、浮々と
 した聲は、叔父の心を誘つた。三吉は椽側（きんがは）のところ立つて、乾いた着物を疊（たぐ）
 て居る娘達の無心な動作を眺めた。そして、お雪や正太の細君（こいづ）などに比べると、

もつとずつと嫩い芽が、最早彼の周圍に頭を持ち上げて来たことを、めづらしく
 思つた。

家

蘇生（いそかへ）るやうな空氣が軒へ通つて来た。夕方から三吉は姪を集めて、遠く生家の方
 に居るお雪の噂（うわさ）を始めた。表の方の農家でも往來へ涼臺（すずみだい）を持出して、夏の夜風を
 樂しむらしかつた。ジャン拳（けん）で負けて氷を買ひに行つたお延は、やがて戻つて來
 た。お俊はコップだの、砂糖（さとう）の壺（つぼ）だのを運んだ。

『皆なに御馳走するか。』

と三吉は、赤い葡萄酒の残りを捜出して、それを砕いた氷にそゝいだ。

お俊の娘らしい話は、手紙のことに移つて行つた。切手を故意に倒（さか）まに貼るのは
 敵意（てきい）をあらはすとか、すこし横に貼るのは戀を意味するとか、そんなことを言出
 す。敵意のあるものなら、手紙を遣取するのもし少し變てはないか、斯う叔父が混

返したのが始まりで、お俊は負けずに言ひ争つた。

「叔父さんなんか、左様いふことはよく知つていらっしやるくせに。」

と軽く笑つて、それからお俊は彼女が學校生活を叔父に語り始めた。三吉は時々、手にしたコップを夜の燈火に透かして見ながら、「左様かナア」といふ眼付をして、耳を傾けて居た。

家

「私は涅槃といふ言葉が大好よ。」とお俊は冷さうに氷を嚙んで言つた。

「あら、いやだ。」とお延はコップの中を掻廻して、「それぢや、お俊姉さまのことを、これから涅槃と……」

「涅槃ツて、何だか音からして好いわ。」

斯様なことからお俊の話は解けて、よく學校の裏手にある墓地へ遊びに行くことを言出した。そこの古い石に腰掛け、落葉の焼けるにほひを嗅ぎながら、讀書す

るのが彼女の樂みであると言出した。

「學校の先生が——小泉さん、貴方は誰にも悪まれないが、そのかはり人に愛される性質で反つて不可……貴方は餘程シツカリして居ないといけません、その爲に苦勞することが有るからツて……」

斯う言ひかけて、お俊は癖のやうに着物の襟を搔合せて、

家

「叔父さんやなんかのことは、自分の身に近い人ですから解りませんがネ……私の知つてる人で、一人も心から敬服するといふ人は無いのよ。あの人はエライ人だとか、何だとか言はれる人でも、私は直にその人の裏面を見ちやつてよ——妙に、私には解るの——解るやうに成つて來るの。」

お延は叔父と従姉妹の顔を見比べた。

「私は二十五に成つたら、叔父さんに自分の通過して來たことを話ませう。よ

小説にいろ／＼なことが書いてあるけれど、自分の一生を考へると、彼様なことは何でも無いわ。私の遭遇つて来たことは、小説よりも、もつと／＼種々なことが有る。』

『そんなら、今こゝて承りませう。』と三吉は半分申談のやうに。

『いゝえ。』

家

『二十五に成つて話すも、今話すも、同じことぢやないか。』

『もつと心が動かないやうに成つたら、其時は話します。今はまだ、心が動いて、駄目よ。』

しばらくお俊の話は途切れた。暗い、静かな往來の方では、農家の人達が團扇をバタ／＼言はせる音がした。

『しかし、叔父さんが私を御覧なすつたら、さぞ馬鹿なことを言つてると御思ひ

なさるでせうねえ。』

『どういたして。』

『必と左様よ。』

『しかし。』と三吉は姪の方を眺めながら『お前が其様なオシヤベリをする人だとは、今迄思はなかつた——今夜、初めて知つた。』

家

『私はオシヤベリよ——ねえ、延ちゃん。』と言つて、お俊はすこし羞ぢらつた顔を袖で掩ふた。

兩國の花火のあるといふ前の日は、森彦からも葉書が来て、お俊やお延は川開に行くことを楽しみに暮した。

翌日の新聞は、隅田川の満潮と、川開の延期とを傳へた。水嵩が増して危いといふ記事は、折角翹望けた娘達をガツカリさせた。左様でなくても、朝から冷しい夏の雨が降つて、出掛けられそうな空模様には見えなかつた。

『延は？』と三吉がお俊に聞いた。

『裏の叔母さんのとこでせう。』

家

女教師の通ふ小学校も休に成つてからは、『叔母さん、叔母さん』と言つて、毎日のやうにも延は遊びに行つた。

庭の草木も濡れて復活つた。毎日々々の暑で、柔軟い鳳仙花などは竹の垣のもとに長い葉を垂れて、紅く咲いた花も死んだやうに成つて居たが、これも雨が來て力を得た。三吉は縁側に出て、シヨンポリと立つて居た。

『叔父さん——何故私が墓場が好きですか、それを御話ませせうか。』

斯うお俊が言出した。三吉は部屋へ戻つて、心地の好い雨を眺めながら、姪の話聞いた。

お俊の言はうとすることは、彼女の若い、悲しい生涯を思はせるやうなものであつた。十六の年に親しい女に死別れて、それから墓畔のさまよひを樂むやうに成つたことや、ある時は是世をあまり淺猿しく思つて、死といふことまで考へたが、母と妹のある爲に思ひ直したこと、自分は苦勞といふものに逢ひに是世へ生れて來たのであらう、といふやうなことなどが、斯の娘の口からされくくに出で來た。

『私は、奈様なことがあつても、自分の性質だけは曲げたくないと思ひますわ。でも、ヒネクレて了やしないか、とそればかり心配して居るんですけれど。』と言つて、やくしばらく沈思した後で、

『しかし、私が今迄遭遇つて来たことの中で、唯一つだけ叔父さんに話させうか。』

斯様ことを言出した。

お俊は、附添して、母より外に斯の事件を知るものがないと言つた。その口振で、三吉には、親戚の間に隠れた男女の關係といふことだけ讀めた。誰が斯の娘に言ひ寄らうとしたか、そんな心當りは少しも無かつた。

『大抵叔父さんには解りましたらうネ。』

『解らない。』三吉は首を振つた。『何か又、お前が誤解したんだらう——雲を烟と間違へたんぢやないか。』

お俊の眼からは涙が流れて来た。彼女は手で顔を掩ふて、自分の生涯を思ひ出しては半ば啜泣くといふ風であつた。一寸縁側へ出て見て、復た叔父の方へ来た。

『叔父さんは……正太兄さんを奈何いふ人だと思ひなすつて……兄さんは叔父さんが信じていらッしやるやうな人でせうか。』

三吉は姪の顔を熱視つた。『——お前の言ふのは正太さんのことかい。』

『私が二十五に成つたら、叔父さんに御話しませうつて言ひましたらう。それよ。』

その一つよ。豊世姉さんが斯様な話を御聞きなすつたら、奈様な顔を成さるてせう……可厭だ、可厭だ……私は一生かゝて憎んでも足りない……』

『あゝ、なんだか變な氣分に成つて来た。何だつて、其様な可厭な話をするんだ。』

『だつて、叔父さんが鑿つて聞くんですもの。』

三吉は『左様かナア』といふ眼付をして、黙つて了つた。

『ね、もつと他の好い話をしませう。』

家

とと俊は微笑んで見せて、窓のある部屋の方へ立つて行つた。そこから手紙を持つて来た。

『多分叔父さんは斯の手紙を書いた人を御存じてせう。』

姪が出て来て見せたものは、手紙と言つても、純白な紙の片にペンで細く書いた僅かな奥床しい文句であつた。『君のやうに香の高い人に遭遇つたことは無い、これから君のことを白い百合の花と言はう、』唯それだけの意味が認めてある。サツパリしたものだ。別に名前も書いて無いが、直樹の手だ。

『今迄も兄さんでしたから、だから眞實の兄さんになつて頂いたの——それおしまひ。』とと俊は言葉を添えた。

斯の『それおしまひ』が三吉を笑はせた。

正太でも、直樹でも娘達は同じやうに『兄さん』と呼んで居た。一方は従兄弟。

一方は三吉が恩人の子息といふだけで、親戚同様にして居たが、血統の關係は無かつた。區別する爲に正太兄さんとか、直樹兄さんとか言つた。三吉も、其時に成つて、いろ／＼知らなかつたことを知つた。

家

實——お俊の父は、三吉とお雪とが夫婦に成つてから、始めて弟の家に來て見た。舊い小泉を相續した斯の一番年長の兄が、暗い悲酸な月日を送つたのも、久しいものだ。彼が境涯の變り果てたことは、同じ地方の親しい『旦那衆』を見ても知れる。一緒に種々な事業を經營した直樹の父は、彼の留守中に亡くなつた。意氣相投じた達雄は、最早拓落失路の人と成つた。

とは言へ、留守中彼の妻子が心配したほど、實は衰へて見えなかつた。彼は兄弟

三二

家

中で一番背の高い人で、體格の強壯なことは父の忠實に似て居た。小泉の家に傳つて、遠い祖先の慾望を見せるやうな、特色のある大きな鼻の形は、彼の容貌にもよく表れて居た。顔の色などはまた艶々として居た。

斯の兄が三吉の部屋へ通つた。丁度、娘達は家に居なかつた。三吉は長火鉢の置いてあるところへ行つて、自分で茶を入れた。それを兄の前へ持つて來た。

一生の身の蹉跌から、實は弟達に逢ふことを遠慮するやうな人である。未だ森彦には一度も逢はずに居る。三吉に逢ふのは漸く二度目である。

『俊は？』と實が自分の娘のことを聞いた。

『一寸新宿まで——延と二人で買物に行きました。』

『御留守居がウマク出来るかな。』

『え、好く遣つて呉れます。今日は二人に、浴衣を一枚ヅ、替つてやることに

しました。』

『それは大悦びだらう。お前のところでも、子が幾人も死んで、随分不幸ついでだつたナ。しかし世の中のこととは、何でも深く考へては不可、淡泊に限る。乃公はその主義サ——家内のことでも——子供のことでも——自分のことでも。』

家

斯様な調子で、あだかも繁華な街衢を歩く人が、右に往き、左に往きして、他を避けやうとするやうに、實は成るべく弟に觸るまいとして居た。彼は弟の手を執つて過去の辛酸を語らうとしなければ、留守中何程の迷惑を掛けたらうと、深くその事を詫びるでもなかつた。唯、舊家の家長が目下の者に對するやうな風で、冷飯の三吉と向ひ合つて居た。

金の話は餘計に兄の矜持を傷けた。病身な宗藏——三吉などが『宗さん、宗さん』と言つて居る兄——斯の人は今だに他所へ預けられて居て、實が世話すべき家族

の一人ではあるが、その方へも三吉には金を出させて居た。種々餘分な工面もさせた上に、復た兄は金策を命じに来た。

『實はNさんのところから、四十圓ばかり借りた。いづれ三吉の方で返しますから、と言つて、時に借りて来た。これは是非お前に造つて貰はにや成らん。』

常惑顔な弟が何か言はうとしたのを實は遮つた。彼は細く書いた物を取出した。

家

これだけの家具を四十圓で引取ると思つて呉れ、と言出した。それには、箆筒、膳、敷物、巻煙草入、其他徳利、盃洗などとしてあつた。

『頼む。』

と兄は無理にも承諾させて、そこへに弟の家を出た。

『留守中は御苦労だつたとか、何とか……それでも一言ぐらゐ挨拶が有りそうなもたナア。』

斯う三吉は、獨語のやうに言つて、嘆息した。尤も、兄が言へないことは、三吉も承知して居た。

家

お俊はお延と一緒に、風呂敷包を小脇に擁えながら歸つた。包の中には、ある呉服屋から求めて來た反物が有つた。

『叔父さんに買つて頂いたのを、お目に懸けませう。』

と娘達は言ひ合つて、流行の浴衣地を叔父の前に置いた。目うつりのする中から、思ひ／＼に見立て、來た涼しさうな中形を、叔父に褒めて貰ふ積りであつた。

『何だつて、斯様な華美なものを買つて來るんだね。』

と叔父は氣に入らなかつた。

『聖世姉さんだつて随分華美なものを着るわねえ。』

斯うお俊が従姉妹に言つた。三吉はそれを聞いて、何故小泉の家が今日のやうに貧乏に成つたらうとか、何故娘達がそれを思はないだらうとか、何故舊い足袋を穿いて居ても流行を競ふやうな量見に成るだらうとか、種々なヤカマしいことを言出した。

家

『でも、斯ういふもので無ければ、私に似合はないんですもの。』

とお俊は萎れた。

やがて三吉は機嫌を直して、お俊の父が金策の爲に訪ねて來たことを話し聞かせた。其時お俊は自分の家の方の噂をした。丁度彼女が歸つて行つた日は、公賣處分の當日であつたこと、ある知人に頼んで必要な家具は買戻して貰つたこと——
執達吏——高利貸——古道具屋——其他生活のみじめさを思はせるやうな言葉が

斯の娘の口から出た。

三吉は家の内をあちこちと歩いた。最後の波に洗はれて行く小泉の家が彼の眼に浮んだ。破産又破産。幾度も同じ事を繰返して、其度に實の集めた道具は言ふに及ばず、母が丹精して田舎で織つた形見の衣類まで、次第に人手に渡つて了つた。實の家では、長い差押の仕末をつけた上で、もつと屋賃の廉いところへ引移る都合である。

家

話が両親のことに移ると、お俊は眼の縁を紅くした。彼女は涙なしに語れなかつた。

『——母親さんには、どうしても詫びることが出来ない。』母親さん、御免なさいよ』と口にはあつても……首は下げても……どうしても言葉には出て来ない。』斯様なことまで叔父に打明けて、濟まないとは思ひつゝ、耳を塞いで、試験の仕

度したことなども語つた。話せば話すほど、お俊は涙が流れて来た。そして、娘らしい、涙に濡れた眼で、數寄な運命を訴へるやうに、叔父の顔を見た。其晩、遅くなつて、お俊は獨りて屋外へ出て行つた。

『叔父さん、お俊姉さまは？』お延が聞いた。

『葉書でも出しに行つたんだらう。』

家

と三吉が答へて居ると、お俊はブラリと戻つて来て、表の戸を閉めて入つた。

『お俊姉さまは屋外で泣いてた。』

『あら。泣きやしないわ。』

『叔父さんは？』

『今迄縁側に腰掛けていらしてつよ。』
斯う娘達は言ひ合つて、洋燈のもとで針仕事をひろげて居た。翌る晩のことである。

お俊はお延の着物を縫つて居た。お延は又、時々従姉妹の方を眺めて、自分の着物がいくらかづゝ形を成して行くことを嬉しさうにして居た。来る花火の晩には、斯の新しい浴衣を着て、涼しい大川の方へ行つて遊ばう、其時は一緒に森彦の旅舎へ寄らう、それから直樹の家を訪ねやう——それからそれへと娘達は樂みにして話した。

家

曇つた空ながら、月の光は地に満ちて居た。三吉は養鶏所の横手から、雑木林の間を通つて、ずつと岡の下の方まで、歩きに行つて來た。明るいやうで暗い樹木の影は、郊外の道路にもあつた。植木屋の庭にもあつた。自分の家の縁側の外に

もあつた。歸つて來て、復た眺めて居ると、姪達はそろ／＼寝る仕度を始めた。

『叔父さん、お先へお休み。』

と言ひに來て、二人とも蚊帳の内へ入つた。叔父は獨りて起きて居た。

楽しい夜の空氣はすべての物を包んだ。何もかも沈まり返つて居た。樹木ですら葉を垂れて眠るやうに見えた。妙に、彼は眠られなかつた。一旦蚊帳の内へ入つて見たが、復た這出した。夜中過と思はれる頃まで、一枚ばかり開けた戸に倚凭つて居た。

家

短い夏の夜が明けると、最早立秋といふ日が來た。生家に居るお雪からは手紙で、酷しい暑さの見舞を書いて寄した。別に二人の姪へ宛て、留守中のことは呉々も宜敷頼む、と認めてあつた。

其日、お俊はすこし心地が悪いと言つて、風通しの好い處へ横に成つた。物も敷

かずに枕をして、心臓のあたりを氷で冷した。お延は、これも鉢巻で、頭痛を苦にして居た。

三吉は子供でも可傷るやうに、

『叔父さんは、病人が有ると心配で仕様が無い。』

『御免なさいよ。』

とお俊は半ば身を起して、詫びるやうに言つた。

死んだ子供の墓の方へは、未だ三吉は行く氣に成らないやうな心の状態にあつた。時々彼は空な懷をひろげて、斯の世に居ない自分の娘を捜した……彼の虚しい手の中には、何物も抱締めて見るやうなものが無かつた……朝に晩に傍へ来る娘達が、もし自分の眞實の子供でもあつたら……斯の考へはすこし彼を呆れさせた。死んだお房のかはりに抱くとしては、お俊などは大き過ぎたからであ

家

る。

家

近所の人達は屋外へ出た。互に家の周囲へ水を撒いた。叔父が洗足で庭へ下りた頃は、お俊も氣分が好く成つたと言つて、臺所の方へ行つて働いた。夕飯過に、三吉は町から大きな水瓜を買つて戻つて來た。思ひの外お俊も元氣なので、叔父は安心して、勉めて呉れる娘達を慰めやうとした。燈火を遠くした縁側のところには、お俊やお延が團扇を持つて來て、叔父と一緒に水瓜を食ひ乍ら、涼んだ。女教師の家へも水瓜を分けて持つて行つたお延は、やがて庭傳ひに歸つて來た。『裏の叔父さんがなし、面白いことを言つたデ——「あ、あ、あ、峯公（女教師の子息）も獨りて富士登山が出来るやうに成つたか、して見ると私が年の寄るのも……」奈何だとか、斯様だとか——笑つて了つたに。』

お延の無邪氣な調子を聞くと、お俊は笑はつた。

何時の間にか、月の光が、庭先まで射し込んで来て居た。お延は早く休みたいと言つて、獨りて蚊帳の内へ入つた。夜の景色が好さそうなので、三吉は前の晩と同じやうに歩きに出た。お俊も叔父に随いて行つた。

家

朝の膳の用意が出来た。お延は臺所から熱いうつしたての飯櫃を運んだ。お俊は自分の手で鹽漬にした茄子を切つて、それを各自の小皿につけて持つて來た。

三吉は直ぐ箸を執らなかつた。例になく、彼は自分で自分を責めるやうなことを言出した。『實に、自分は馬鹿らしい性質だ、』とか、何だとか、種々なことを言つた。

『これから叔父さんも、もつと奈様かいふ人間に成ります。』

家

斯う三吉はすこし改まつた調子で言つて、二人の姪の前に頭を下げた。

お俊やお延は笑つた。そして、叔父の方へ向いて、意味もなく御辭儀をした。

漸く三吉は箸を執り上げた。ウマさうな味噌汁の香を嗅いだ。其朝は、よく可笑しな顔付をして姪達を笑はせる平素の叔父とは別の人のやうに成つた。死んだ子供等のことを思へば、斯うして飯を食ふのも難有いとこの——實の家族が今日あるは、主に森彦の力である、お俊などはそれを忘れては成らないこと——朝飯

の濟んだ後に成つても、まだ叔父は娘達に説き聞かせた。

斯ういふ尤もらしいことを言つて居る中にも、三吉が狼狽てた容子は隠せなかつた。彼は窓の方へ行つて、往來に遊んで居る子供等の友達、餌を獵り歩く農家の鶏などを眺めながら、前の晩のことを思つて見た。草木も青白く煙るやうな夜であつた。お俊を連れて、養鶏所の横手から彼の好きな雑木林の道へ出た。月光を

浴びながら、それを楽しんで歩いて居ると、何處で鳴くともなく幽かな蟲の歌が聞えた。その道は、お房やお菊が生きて居る時分に、よく隨いて来て、一緒に花を摘つたり、手を引いたりして歩いたところである。不思議な力は、不圖、姪の手を執らせた。それを彼は奈何することも出来なかつた。『斯様な風にして歩いちや可笑しいだらうか、』と彼が串談のやうに言ふと、お俊は何處までも頼りにするといふ風で、『叔父さんのことでもすもの、』と平素の調子で答へた。斯の『斯様な風にして歩いちや可笑しいだらうか、』が、彼を呆れさせた。

『馬鹿！』

三吉は窓のところに立つて、自分を嘲つた。

お俊やお延は中の部屋に机を持出した。『お雪叔母さん』のところへ手紙を書くと言つて、互に紙を展げた。別に、お俊は男や女の友達へ宛てて送るつもりで、自

分て書いた繪葉書を取出した。それをお延に見せた。

お延はその繪葉書を机の上に並べて見て、

『お俊姉さま、私にも一枚書いてお呉んなんしよや。』

と従姉妹の技術を羨むやうに言つた。

お俊に繪畫を學ぶことを勧めたのは、もと三吉の發議であつた。彼女の母親は、貧しい中にも娘の行末を樂みにして、畫の先生へ通ふことを廢めさせなかつた。幾年か彼女は花鳥の模倣を習つた。三吉の家に来てから、叔父は種々な繪畫の話をして聞かせて、直接に自然に見ることを教えやうとした。次第に叔父は左様いふ話をしなく成つた。

庭の垣根のところには、鳳仙花が長く咲いて居た。やがてお俊はそれを折取つて來た。萎れた花の形は、美しい模様はやうに葉書の裏へ寫された。その色彩がお

家

延の眼を喜ばせた。

『叔父さん、見ちや厭よ。』

と俊は、傍へ来た叔父の方を見て、自分の書いた繪葉書を両手で掩ふた。

学校の友達の噂から、復た俊の話は引出されて行つた。彼女は日頃崇拜する教師のことを叔父に話した。学校の先生に言はせると、是世には十の理想がある、それを合せると一つの大きな理想に成る——七つまでは彼女も考へたが、後の三つはどうしても未だ思ひ付かない、この夏休はそれで頭腦を悩まして居る。斯様なことを言出した。俊は附添して、丁度先生は『吾家の祖父さん』のやうな人だと言つた。先生と忠寛とは大分違ふやうだ、と三吉が相手に成つたのが始まりで、俊は負けずに言ひ争つた。

『へえ、お前達はそんな夢を見てるのかい。』

家

と叔父は言はうとしたが、それを口には出さなかつた。彼は幅の廣い肩を動つて、黙つて自分の部屋の方へ行つて了つた。

夜が来た。

家

屋外は晝間のやうに明るい。燐のやうな光に誘はれて、復た三吉は雑木林の方まで歩きに行きたく成つた。俊は叔父に連れられて行つた。

やがて、三吉達が散歩から戻つて来た頃は、最早遅かつた。表の農家では戸を閉めて了つた。往來には、大きな犬が幾つも寝そべつて頭を持上げたり、耳を立てたりして居た。中には月あかりの中を馳出して行くのもあつた。三吉は姪を庇護ふやうにして、その側を盗むやうに通つた。表の門から入つて、金目垣と窓との

狭い間を庭の方へ抜けると、裏の女教師の家でも寝た。三吉の家の方へ向いた暗い窓は、眼のやうに閉ぢられて居た。

深い静かな晩だ。射し入る月の光は、縁側のところへ腰掛けた三吉の膝を照らした。お俊は、従姉妹の側へ寝に行つたが、眼か冴えて了つて眠られないと言つて、白い寝衣のまゝで復た叔父の側へ来た。

家

急に犬の群が竹の垣を潜つて、庭の中へ突進して来た。互に噛合つたり、尻尾を振つたりして、植木の周囲を駆けずり廻つて戯れた。ふと、往來の方で仲間の吠える聲が起つた。それを聞いて、一匹の犬が馳出して行つた。他の犬も後を追つて、復た一緒に馳出して行つた。互に鳴き合ふ聲が夜更けた空に聞えた。

『眞實に——寝て了ふのは可憐いやうな晩ねえ。』

と言つて、考へ沈んだ姪の側には、叔父が腰掛けて、犬の鳴聲を聞いて居た。叔

父は犬のやうに震へた。

『まだ叔父さんは起きていらしつて?』とそのうちにお俊が尋ねた。

『ア、叔父さんに關はずサツサと休んどくれ。』

と言はれて、お俊は従姉妹の方へ行つた。三吉は獨りて自分の身體の戰慄を見て居た。

家

翌朝になると、復た三吉は同じやうなことを二人の姪の前で言つた。『叔父さんも心を入替えます。』とか、『俺も斯様な人間では無かつた積りだ。』とか、言つた。

『奈何したと言ふんだ——一體、俺は奈何したと言ふんだ。』

と彼は自分で自分に言つて見て、前の晩もお俊と一緒に歩いたことを悔むた。

容易に三吉が精神の動搖は静まらなかつた。彼は井戸端へ出で、冷い水の中へ手足を突浸したり、乾いた髪を濡したりして来た。

『オイ、叔父さんの背中を打つて見てお呉れ。』

斯う言つたので、娘達は笑ひながら叔父の背後へ廻つた。

『奈何に強くても宜う御座んすか。』とお俊が聞いた。

『可いとも。お前達の方なら……背中の骨が折れても關はない。』

『後で怒られても困る。』とお延は笑つた。

家

叔父は娘達に吩咐けて、『もうすこし上』とか『もうすこし下』とか言ひながら、骨を噛まれるやうな身體の底の痛みを打たせた。

日延に成つた兩國の川開があるといふ日に當つた。お俊やお延は、森彦の旅舎へも寄ると言つて、午後の三時頃から出掛る仕度をした。そこへお俊の母お倉が訪ねて来た。お倉は、夫が頼んで置いた金を受取りに来たのであつた。

『母親さん、御免なさいよ——着物を着ちまひますから。』

とお俊は母に挨拶した。お延も従姉妹の側で新しい浴衣に着更へた。

お倉は三吉の前に坐つて、娘の方を眺めながら、

『三吉叔父さんに好いのを買つて頂いたネ。叔母さんの御留守居がよく出来るか知らん、左様言つて毎日家で噂をして……学校の御休の間に、叔父さんの側に居て、種々教えて頂くが好い……』

家

三吉は嫂と姪の顔を見比べた。

『眞實に、御役にも立ちますまい。黙つて見て居ないで、ズン／＼世話を焼いて下さい。』

『母親さん、鶴ちゃんは何して居て?』とお俊が立つて身仕度をしながら尋ねた。

『ア、鶴ちゃんも毎日勉強してる。』

斯うお倉は答へながら、娘の方へ行つて、帯を締る手傳ひをしたり、臺所の方まで見廻りに行つたりした。

「叔父さん、リボンを見てお呉んなんしよ。」とお延が三吉の傍へ来た。

「私のも、似合ひまして？」とお俊も来て、うしろむきに身を斜にして見せた。三吉は約束の金を嫂の前に置いた。お倉はそれを受取つて、帯の間へ仕舞ひながら、宗藏の世話を頼むといふことや、正太がちよいく遊ぶといふことや、それから自分の夫が今度こそは好く行つて貰はなければ成らないといふことなどを話し込んだ。

家

娘達は最早花火の音が聞えるといふ限付をした。そこまでお倉を送つて行かう、と催促した。

「母親さんは煙草を忘れて来た。一寸叔父さんに一服頂いて。」

お倉は弟が出した巻煙草に火を點けて、橋本の姉も奈何して居るかとか、大番頭の嘉助も死んだそうだとか、豊世を早く呼寄せるやうにしなければ、正太の爲にも成らないとか、それからそれへと話した。

「母親さん、早く行きませうよ。」とお俊はジレッタさうに。

家

「ア、今行く。」と言つて、お倉は弟の方を見て、「今度といふ今度は、それでも吾夫も懲りましたよ。私がツケ〜言ふもんですからネ、「お前はイケナイ奴に成つた、今迄はもつと優しい奴だと思つて居た」なんて、吾夫が左様言つて笑ふんですよ。でも、貴方、今迄のやうな大きな量見て居られると、失敗するのは眼に見えて居ます。何の位私達が苦勞をしたか分りませんからネ——眞實に、

三吉さんなどは堅くて好い。」

三吉は額へ手を當てた。

家

間もなくお倉は、種々と娘の世話を焼きながら、連立つて出て行つた。兩國橋邊の混雑を思はせるやうな夕方が来た。三吉は燈火も點けずに、薄暗い部屋の中に震へながら座つて居た。何となく可恐しいところへ引摺込まれて行くやうな、自分の位置を考へた。今のうちに踏留まらなければ成らない、と思つた。しばらく忘れて居た妻のことも彼の胸に浮んだ。次第に家の内は暗く成つた。遠く花火の上る音がした。

『残暑さびしく候ところ、御地皆々さまには御機嫌よく御暮し遊ばされ候由、目出度どんじあげまゐらせ候。ばい死去の節は、早速雪子御遣はし下され、ありがたく存じ候。御蔭さまにて法事も無事に相済み、その節は多勢の客などいたし申

家

し候。それもこれも亡き親の御蔭と存じまゐらせ候。さて雪子あまり長く引留め申し、おん許様には何角御不自由のこと、御察し申しあげ候。俊子様、延子様にも御苦勞相掛け、まことに御氣の毒とは存じ候へども、何分にも斯のお暑さ、それに種夫さん同道とありては歸りの旅も案じられ候につき、今すこしく冷しく相成り候まで當地に逗留いたさせたく、私より御願ひ申上げらる。何卒く悪しからず御思召下されたく候——』

三吉が名倉の母から手紙を受取つた頃は、何となく空氣も濕つて秋めい來た。お俊は叔父の側へ來て、餘計に忸々しく言葉を掛けた。

『叔父さん、今何事も用が有りませんが、肩が凝るなら、按摩さんでもして進げませうか。』

『澤山。』

『すこし白髪を取つて進げませうネ。』

『澤山。』

『叔父さんは今日は奈様かなすつて?』

『奈様もしない——叔父さんを關はずに置いてお呉れ——お前達はお前達の爲ることを爲てお呉れ——』

家

例になく厭ひ避けるやうな調子で言つて、叔父が机に對つて居たので、お俊はまた何か機嫌を損ねたかと思つた。手持不沙汰に、勝手の方へ引返して行つた。

『お俊姉様——兄様が御出たぞなし。』

とお延が呼んだ。

直樹が来た。相變らず濃厚で、勤勉なのは、斯の少壯な會社員だ。ンツカリとした老祖母が附いて居るだけに、親譲りの夏羽織などを着て、一寸訪ねて來るにも

家

服装を崩さなかつた。三吉のことを『兄さん、兄さん』と呼んで居る斯の青年は年寄にも子供にも好かれた。

叔父は娘達を直樹と遊ばせやうとして居た。斯うして郊外に住む三吉は、自分で直樹の相手に成つて、斯の弟のやうに思ふ青年の口から、下町の變遷を聞かうと思ふばかりでは無かつた。彼は二人の姪を直樹の傍へ呼んだ。黒い土藏の反射、紺の暖簾の香——左様いふもの、漂ふ町々の空氣が奈何に改まりつゝあるか、高い雲を並べた商家の繁昌が奈何に昔の夢と變りつゝあるか、曾て三吉が直樹の家に書生をして居る時分には、名高い大店の御隠居と唄はれて、一代の榮華を極め盡したやうな婦人も、奈何に寄る年波と共に、下町の空氣の中へ沈みつゝあるか——斯ういふ話を娘達にも聞かせた。

『俊、大屋さんの庭の方へ、直樹さんを御案内したら可からう。』

と叔父に言はれて、お俊は花の絶えない盆栽棚の方へ、植木好きな直樹を誘つた。
お延も一緒に随つて行つた。

若々しい笑聲が庭の樹木の間から起つた。三吉は縁側に出て聞いた。無垢な心で直樹や娘達の遊んで居る方を、楽しさうに眺めた。彼は、自分の羞恥と悲哀とを忘れやうとして居た。

家

やがて娘達は、庭の鳳仙花を摘つて、縁側のところへ戻つて来た。白いハンケチをひろげて、花や葉の液を染めて遊んだ。鳳仙花は水分が多くて成功しなかつた。直樹は軒の釣葱の葉を摘つて與へた。お俊は鉄の尻でトン／＼叩いた。お延の新しいハンケチの上には、葱の葉の形が鮮明に印された。

暮れてから直樹は歸つて行つた。三吉は二人の姪に吩咐けて、新宿近くまで送らせた。

『俊は？』

ある日の夕方、三吉は臺所の方へ行つて尋ねた。お延は茄子の皮を剥いて居た。

『姉様かなし、未だ歸つて来ないぞなし。』とお延は流汗に腰掛けながら答へた。

一寸お俊は自分の家まで行つて来ると言つて、出た。歸りが遅かつた。

家

『何とかお前に云つたかい。』と叔父が心配さうに聞いた。

お延は首を振つて、復た庖丁を執り上げた。茄子の皮は粗板の上へ落ちた。

待つても／＼お俊は歸らなかつた。夕飯が済んで、燈火が點いても歸らなかつた。八時、九時に成つても、未だ歸らなかつた。

『必と今夜は泊つて来る積りだ。』

と言つて見て、三吉は表の門を閉めに行つた。掛金だけは掛けずに置いた。十時過ぎまで待つた。到頭お俊は歸らなかつた。

次第に三吉は恐怖を抱くやうに成つた。いつもお俊が風呂敷包の置いてあるところへ行つて見ると、着物だの、書籍だのは、其儘に成つて居るらしい。三吉はすこし安心した。自分の部屋へ戻つた。

家

『俊は最早歸つて来ないんぢやないか。』

夜が更けるに随つて、斯様なことまで考へるやうに成つた。

壁には、お房の引延した寫眞が額にして掛けてある。洋燈の光がその玻璃に映つた、三吉は火の影を熟と視つめて、何をお俊が母親に語りつゝあるか、と想像して見た。近づいて見れば、叔父の三吉も、従兄弟の正太と左様大した變りが無い……低い鋭い聲で、斯う語り聞かせて居るだらうか。それは唯考へて見たばかり

でも、暗い、遺瀨ない心を三吉に起させた。

『俊はまた、何を間違へたんだ。俺は其様な積りぢや無いんだ。』

臆病な三吉は、斯うすべてを串談のやうにして、笑はうと試みた。『叔父さん、叔父さん』と頼みにして来て、足の裏を踏んで呉れるとか、耳の垢を取つて呉れるとか、その心易だてを彼は奈何することも出来なかつたのである。『結婚しない前は、俺も斯様なことは無かつた。』斯う嘆息して、三吉は寢床に就いた。

家

翌朝、お俊は歸つて来た。彼女は別に變つた様子も見えなかつた。

『奈何したい。』

と叔父はお延の居るところで聞いた。彼は心の中で、よく歸つて来て呉れたと思つた。

『なんだか急に父親さんや母親さんの顔が見たく成つたもんですから……突然に

家へ歸つたら、皆な驚いちやつて……』

斯う答へるお俊の手を、お延は娘らしく握つた。お俊は皆なに心配させて氣の毒だつたといふ眼付をした。

漸く三吉も力を得た。日頃義理ある叔父と思へばこそ、斯うして働きに來て呉れると、お俊の心をあはれにも思つた。

家

其日から、三吉は成るべく姪を避けやうとした。避けやうとすればするほど、餘計に卷込まれ、蹂躪られて行くやうな氣もした。彼は最早、苦痛なしに姪の眼を見ることか出来なかつた。どうかすると、若い女の髪が蒸されるとも、身體が燃えらるゝもつかないやうな、今迄氣のつかなかつた、極く々々幽かな臭氣が、彼の鼻の先へ匂つて來る。それを嗅ぐと、我知らず罪もないものゝ方へ引寄せられるやうな心地がした。斯の勢で押進んで行つたら、自分は畢竟奈何なる……と彼

は思つて見た。

『俺は、もう逃げるより他に仕方が無い。』

到頭、三吉は斯様な狂人じみた聲を出すやうに成つた。

家

二人の前垂を持つた商人らしい男が、威勢よく格子戸を開けて入つて來た。一人は正太だ。今一人は正太が連れて來た種といふ客だ。

『今日は。』

と正太はお俊やお延に挨拶して置いて、連と一緒に叔父の部屋へ通つた。

お俊は茶戸棚の前に居た。客の方へ煙草盆を運んで行つた従姉妹は、やがて彼女の側へ來た。

『延ちゃん、貴方持つて行つて下さいな——私が入れますからネ。』
 と言つて、お俊は茶を入れた。

客の榊といふは、三島の方にある大きな醤油屋の若主人であつた。不圖したことから三吉は懇意に成つて、斯の人の家へ行つて泊つたことも有つた。十年も前の話。榊なら、それから忘れずに居る舊い相識の間柄である。唯、正太と一緒に來たのが、不思議に三吉には思へた。そればかりではない、醤油藏の白壁が幾つも並んで日に光る程の大きな家の若主人が、東京に出て假に水菓子屋を始めて居るとは。加に、若い細君が水菓子を買つたと聞いた時は、榊が戯れて言ふとしか三吉には思はれなかつた。

『現に、私を買ひに行きました。』と正太が言出した。『私もネ、しばらく氣分が悪くて、伏枕つて居ましたから、何か水氣のある物を食べたいと思つて買はせに遣

るうちに……どうも話の様子では、普通の水菓子を買つて賣る家の内儀さんでは無い。聞いて見ると、御名前が榊さんだ。小泉の叔父の話に、よく榊さんといふことを聞くが……もしや……と思つて、私が自分で買ひに行つて見ました。果して叔父さんの御馴染の方だ。それから最早斯様に御懇意にするやうに成つちやつたんです。』

家

『橋本君とはスカツリお話が合つて了つて。』と言つて、榊は精悍な眼付をして、
 『先生——何處で奈何いふ人に逢ふか、全く解りませんネ。』
 榊の『先生』は口癖である。

正太は時々お俊の方をも見た。『叔父さん、種々御心配下さいましたが、裏の叔父さんから頼んで頂いた方はウマく行きませんでした。そのかはり、他の店に口がありそうです。實は榊君も私と同じやうに兜町を狙つて居るんです。』

其日の正太は元氣で、夏羽織なども新しい瀟洒としたものを着て居た。『今にウンと一つ働いて見せるぞ。』と彼の男らしい、どこか苦味を帯びた眼付が言つた。彼は勃々とした心を制えかねるといふ風に見えた。

話の最中、三吉は斯の甥の顔を眺めて居ると、

『あれ、兄さんがいけません。』

と鋭く呼ぶ姪の聲を耳の底の方で聞くやうな氣がした。

『丁度こゝに同じやうな人間が二人揃つたといふものです。』と榊は三吉と正太の顔を見比べた。『左様言つちや失敬ですが、橋本君だつても……御國の方で大きくやつていらしたんでせう……僕も、まあ、言つて見れば、似たやうな境遇なんです。』

正太は良家に育つた人らしい手で、膝の前垂を直して見た。

『ねえ、橋本君、左様ぢや有りませんか。』と榊は言葉を繼いで、『これから二人て手を携へて大に行らうぢや有りませんか。僕もネ、今の水菓子屋などはホンの腰掛ですから、あの店は畳みます。いづれ家内は郷里の方へ歸します。』

『多分、榊君の方が、私よりは先にある店へ入ることに成りませう。』と正太は叔父に話した。

家

三島にある城のやうな家、三吉が寝た二階、入つた風呂、上つて見た土蔵、それから醬油を醸す大きな桶が幾つも並んで居た深い倉——左様いふものは奈何成つたか。榊はそれを語らうとしなかつた。唯、前途を語つた。やがて、若々しい、爽快な笑聲を残して、正太と一緒に席を立つた。

玄關のところて、正太はち俊から帽子を受取りながら、

『延ちゃん、頭腦の具合は?』

『え、もうスツカリ癒つた。』とお延は無邪氣に笑つた。

『お医者様が病氣でも何でも無いツて、左様仰つたら、延ちゃんは薬を服むのもキマリが悪く成つたなんて。』とお俊は笑つて、正太の方を見ずに、お延の方を見つた。

家

『静かな田舎から、斯ういふ刺激の多い都會へ出て來るとネ。』と正太も庭へ下りてから言つた。

叔父、甥、姪などの交換した笑聲は、客の耳にも陸まじさうに聞えた。お延は自分分が笑はれたと思つたかして、袖で顔を隠した。お俊は着物の襟を堅く掻合せて居た。

郊外の道路には百日紅の花が落ちた。一夏の間、熱い寂しい思をさせた花が、表の農家の前には、すこし色の褪めたまゝで未だ咲いて居た。實に住む町のあたりは祭の日に當つたので、お俊はお延を連れて、泊りがけに行く仕度をした。

『叔父さん、晩召上る物は用意して置きましたから。』とお俊が言つた。

家

『よし、よし、二人とも早くおいで。叔父さんが御留守居する——俺は獨りてノンキにやる。』

斯う答へて、三吉はいくらかの小使を娘達に呉れた。

二人の姪は明日の七夕にあたることなどを言合つて、互に祭の樂しさを想像しながら、出て行つた。娘達を送出して置いて、三吉はピッタリ表の門を閉めた。掛金も掛けて了つた。

窓のところへ行くと、例の紅い花が日は萎れて見える。そのうちに三吉は窓の戸

も閉めて了つた。家の内は、寺院にても居るやうにシンカンとして来た。
『これで、まあ、漸く清々した。』

と手を揉みながら言つて見て、三吉は庭に向いた部屋の方へ行つた。

九月の近づいたことを思はせるやうな午後の光線は、壁に掛かつた子供の額を寂しさに見せた。そこには未だち房が居る。白い蒲團を掛けた病院の寢臺の上に横に成つて、大きな眼で父の方を見て居る。三吉はその額の前に立つた。光線の反射の具合で、玻璃を通して見える子供の寫眞の上には、三吉自身が薄く重なり合つて映つた。彼は自分で自分の悄然とした姿を見た。

三吉は獨りて部屋の内を歩いた。静かに過去つたことを胸に浮べた。この一夏の留守居は、夫と妻の繋がれて居る意味をつくづく思はせた。彼は、結婚してから自分が結婚しない前の自分で無いに、呆れた。由緒のある大きな寺院へ行くと、

家

案内の小坊主が古い壁に掛つた繪の前へ參詣人を連れて行つて、僧侶の一生を説明して聞かせるやうに、丁度三吉が肉體から起つて来る苦痛は、種々な記憶の前へ彼の心を連れて行つて見せた。そして、家を持つた年には斯ういふことが有つた、三年目は彼様いふことが有つた、と平素忘れて居たやうなことを心の底の方で私語いて聞かせた。それは特勝氣な僧侶の一代記のやうなものでは無かつた。

家

どれもこれも女のついた心の繪だ。隠したいと思ふ記憶ばかりだ。三吉は、深く、深く、自分に呆れた。

遠く雷の音がした。夏の名残の雨が來るらしかつた。

『只今。』

お雪は種夫を抱きながら、車から下りた。下婢も下りた。

『叔父さん、叔母さんが御歸りですよ。』

と二人の姪は、叔父を呼ぶやら、叔母の方へ行くやらして、門の外まで出て迎へた。二つの車に分けて載せてある手荷物は、娘達が手傳つて、門の内へ運んだ。『どうも長々難有う御座いました。』

家
と娘達に禮を言ひながら、お雪は入口のところまで車代を拂つて、久し振で夫や姪の顔を見た。

『種ちゃんもお腹が空いたでせう。先づ一ぱい呑みませうネ。』

とお雪が懐をひろげた。三吉は子供のウマさうに乳を呑む音を聞きながら、『あゝ、好いところへお雪が歸つて来て呉れた。』とい思つた。

娘達は茶を入れて持つて来た。お雪は乾いた咽喉を濡して、旅の話始めた。や

がて、汽船宿の扱ひ札などを貼付けた手荷物が取出された。

『父さん、濟みませんが、この鞆を解いて見て下さいな。お俊ちゃん達に進げる物がこの中に入つて居る筈です——生家の父親さんは斯様に堅く荷造りをして呉れて。』

斯うお雪が言つた。

家

幾年振かて生家の方へ行つたお雪は、多くの親戚から送られた種々な土産物を持つて歸つて来た。これは名倉の姉から、これは④の姉から、これは今の妹から、とそこへ取出した。④は彼女が二番目の姉の家で、今は妹のお福の家である。『名倉母より』とした土産がお俊やお延の前にも置かれた。

斯の荷物のゴチャ／＼した中で、お雪は往復の旅を混合せて夫に話した。

『私が生家へ着きますとネ、しばらく父親さんは二階から下りて来ませんでした』

よ。そのうちに下りて来て、臺所へ行つて顔を洗つて、それから挨拶しました。父親さんは私の顔を見ると、碌に物も言へませんでした……」

『餘程嬉しかつたと見えるネ。』

『よく斯様に早く仕度して来て呉れたツて、後で左様言つて喜びました。私が行くまで、老祖母さんの葬式も出さずに有りましたツけ。』

家

お雪の話は歸路のことに移つて行つた。出發の日は、姉妹から親戚の子供達まで多勢波止場に集つて別離を惜んだこと、妹のお福などは船まで見送つて来て、漕ぎ別れて行く解の方からハンケチを振つたことなどを話した。お雪は又、やゝ躊躇した後で、歸路の船旅を妹の夫と共にしたことを話した。

『へえ、勉さんが一緒に来て呉れたネ。』と三吉が言つた。

『商法の方の用事があるからツて、今が途中まで送つて來ました。』

お雪が勉のことを話す場合には、『福ちゃんの日那さん』とか、『今』とか言つた。成るべく彼女は舊いことを葬らうとして居た。唯、親戚として話さうとして居た。それを三吉も察しないでは無かつた。彼の方でも、唯、親戚として話さうとして居た。

家

旅の荷物の中からは、お雪が母に造つて貰つた夏衣の類が出て來た。ある懇意な家から餞別に送られたといふ圓みのある包も出て來た。

まだ客のやうな顔をして、かしてまつて居た下婢は、その包を眺めて、

『今さんがそれを間違へて、何だ、是は、水瓜なら食へ、なんて仰有つて、船の中で解いて見ましたツけ……』

『青い花瓶……』

とお雪は笑つた。

勉には、三吉も直接に逢つて居た。以前彼が名倉の家を訪ねた時に、既に名のり合つて、若々しい、才氣のある、心の好さそうな商人を知つた。

『どれ、御線香を一つ上げて。』

とお雪は佛壇の方へ行つて、久し振て小さな位牌の前に立つた。土産の菓子や果物などを供へて置いて、復た姪の傍へ來た。

家

『眞實にお俊ちゃんも、御迷惑でしたらうねえ——さぞ、東京はお暑かつたでせうねえ——。』

『え、今年の暑さは別でしたよ。』

『彼地もお暑かつたんですよ。』

斯様な言葉を親しげに交換しながら、お雪は家の内を可憐しさうに眺め廻した。彼女は、左の手の薬指に、細い、新しい指輪なども嵌めて居た。

そのうちにお雪は旅で汚れた白足袋を脱いだ。彼女は臺所の方へ見廻りに行つて、自分が主に成つて働き始めた。

お俊が叔父や叔母に禮を述べて、自分の家をさして歸つて行つたのは、それから

二三日過ぎてのことであつた。『すつかり私は叔父さんの裏面を見ちやつてよ——

三吉叔父さんといふ人はよく解つてよ、』斯う骨を刻るやうな姪の眼の光を、三吉

家

は忘れることが出来なかつた。それを思ふ度に、人知れず彼は冷たい汗を流した。

彼は、最早以前のやうに、苦痛なしに自分を考へられない人であつた。同時に、

他をも考へられなく成つて來た。家の生活で結び付けられた人々の、微妙な、陰

影の多い、言ふに言はれぬ深い關係——左様いふものが重苦しく彼の胸を壓して

來た——叔父姪、従兄妹同志、義理ある姉と弟、義理ある兄と妹……

四

三吉が家が横手にある養鶏所の側から、雑木林の間を通り抜けたところに、草地がある。緩やかな傾斜は浅い谷の方へ落ちて、草地を岡の上のやうに見せて居る。雑木林から續いた細道は、コンモリとして杉の木立の邊で盡きて、そこから坂に成つた郊外の裏道が左右に連なつて居る。馬に乗つた人などが其の道を通りつゝある。

武藏野の名残を思はせるやうな、斯の静かな郊外の眺望の中にも、よく見れば驚

くべき變化が起つて居た。植木島、野菜島などはドシ／＼潰されて了つた。土は掘返された。新しい家屋が増えるばかりだ。

三吉は斯の草地へ来て眺めた。日のあつた草の中では蟋蟀が鳴いて居た。山から下りて来たばかりの頃には、お菊はまだ地方に居る積りて、「房ちゃん、御城趾へ花摘りに行きますやう、」などと言つて、姉妹で手を引き合ひながら、父と一緒に遊びに来たものだつた。お繁は死に、お菊は死に、お房は死んだ。三吉は、何の爲に妻子を連れて斯の郊外へ引移つて来たか。それを思はず居られなかつた。つく／＼彼は努力の爲すなきを感じた。

家

遠い空には綿のやうな雲が浮んだ。友人の牧野が住む山の方は、定めし最早秋らしく成つたらうと思はせた。三吉は眺め佇立して、更に長い仕事を始めやうと思ひ立つた。

家

新宿の方角からは、電車の響が唸るやうに傳はつて来る。丁度、彼が寂しい田舎に居た頃、山の上を通る汽車の音を聞いたやうに、耳を欲立て、町の電車の響を聞いた。山から郊外へ、郊外から町へ、何となく彼の心は響のする方へ動いた。それに、子供等の遊友達を見ると、思出すことばかり多くて、斯の静かな土地を離れたく成つた。彼は町の方へ家を移さうと考へた。そのゴチャクした響の中で、心を紛したり、新規な仕事の準備に取掛つたりしやうと考へた。家を指して、雑木林の間を引返して行くと、門の内に家の圖を引いて居る人があつた。矢張り斯の郊外に住む風景畫家だ。お雪は入口のところ居て、何の窓が何の方角にあるなど、話し聞かせて居た。風景畫家は洋服の袖隠から礫石を取出した。引いた圖の方角をよく照らし合せて見て、ある家相を研究する人のことを三吉に話した。あまり子が死んで不思議だ、

家相といふことも聞いて見給へ、これから家を移すにしても方角の詮議もして見ることが可い、斯う言つて、猶この家の圖は自分の方から送つて置く、と親切な口調で話して行つた。

『彼様いふ畫を描く人でも、方角などを氣にするかなア。』

家

と三吉は言つて見たが、しかし家の圖までも引いて行つて呉れる風景畫家の志は難有く思つた。

お雪は夫の方を見て、

『貴方のやうに關はなくても困る。人の言ふことも聞くもんですよ。山を發つ時にも、日取が悪いから、一日延ばせといふものを無理に發つたりなんかして、だから彼様な不幸が有るなんて、後で近所の人に言はれたりする……それは左様と、何だが私は斯の家に居るのが厭に成つた。』

斯う言ふ妻の爲にも、三吉は家に移さうと決心した。信心深い植木屋の人達は又、早く三吉の去ることを望んだ。何か、彼が禍を背負つて、折角新築した家へケチを付けにても来たやうに思つて居た。それを聞くにつけても、三吉は早く去りたかつた。

外濠線の電車は濠に向つた方から九月の日をうけつゝあつた。客の中には立つて窓の板戸を閉めた人もあつた。その反對の側に腰掛けた三吉は、丁度家を探し歩いた歸りがけて、用達の都合で斯の電車に乗合はせた。彼は森彦の旅舎へも寄る積りであつた。

昇降する客に混つて、二人の紳士がある停留場から乗つた。

『小泉君。』

とその紳士の一人が聲を掛けた。三吉は幾年振かて、思ひがけなく大島先生に逢つた。

割合に込んだ日で、大島先生は空いたところへ行つて腰掛けた。三吉と反對の側に乗つたが、逆があるのと、客を隔てたのとて、互に言葉も替さなかつた。二人は黙つて乗つた。

大島先生は、一夏三吉が苦しんだ熱い思を、幾夏も経験したやうな人であつた。細君に死別れてから、先生は悲しい噂ばかり世に傳へられるやうに成つた。改革者のやうな熱烈な口調で、かつて先生が慷慨したり痛嘆したりした聲は、皆な逆

に先生の方へ戻つて行つた。正義、愛、美しい思想——左様いふ先生の考へたことと言つたことは、残らず葬られた。正義も夢、愛も夢、美しい思想も夢の如く

であつた。唯、先生には變節の名のみが残つた。昔親切によく世話をした遣つた多くの後輩の前にも、先生は黙つて首を垂れて、「鞭撻て」と言はないばかりの眼付をする人に成つた。舊い友達は大抵先生を捨てた。先生も舊い友達を捨てた。以前に比べると、大島先生はずつと肥つた。服装なども立派に成つた。しかし以前の貧乏な時代よりは、今日の方が幸福であるとは、先生の可傷しい眼付が言はなかつた。

斯の縁故の深い、舊時戀しい人の前に、三吉は考へ沈んで、頭腦の痛くなるやうな電車の響を聞いて居た。先生の書いたもので思出す深夜の犬の鳴聲——斯様な突然に起つて来る記憶が、懷舊の情に混つて、先生のことゝもつかず、自分のことゝもつかず、丁度電車の窓から見える人家の窓や柳の葉のやうに、三吉の胸に映つたり消えたりした。

そのうちに、三吉は大島先生の側へ行つて腰掛けることが出来た。先生は重い體軀を三吉の方へ向けて、手を執らないばかりの可憐しさうな姿勢を示したが、昔のやうには語らうとして語られなかつた。

『オ、鍛冶橋に來た。』

と先生はあわたゞしく起上つて、窓から外の方の市街を見た。

『もう御降りに成るんですか。』と三吉も起上つた。

『小泉君、こゝで失敬します。』

といふ言葉を残して置いて、大島先生は電車から降りた。

『吾儕に媒酌人をして呉れた先生だつたけナア。』

斯う思つて、三吉が見送つた時は、酒の香にすべての悲哀を忘れやうとするやうな寂しい、孤獨な人が連の紳士と一緒に柳の残つて居る橋の畔を歩いて居た。

電車は通り過ぎた。

家

『小泉さんはおいでですか。』

三吉は森彦の旅舎へ行つて訪ねた。そこでは内儀さんが變つて、女中をして居た婦人が丸髷に結つて顔を出した。

電話口に居た森彦は、弟の三吉と聞いて、二階へ案内させた。部屋にはお俊も來合せた居た。森彦は電話の用を済まして、別の樓梯から上つて來た。

三吉はお俊と不思議な顔を合せた。殊に嚴格な兄の前では、いかにも姪の女らしい黙つて視て居るやうな様子がツラかつた。彼は、夏中手傳ひに來て居て貰つた時のやうな、親しい、樂々とした氣分で、斯の娘と對ひ合ふことが出來なかつた。

何となく堅くなつた。

『森彦叔父さん、私は學校の歸りですから。』とお俊が催促するやうに言つた。

『左様かい。ちや着物は宜しく頼みます。母親さんに左様言つて、可いやうに仕立て、貰つても呉れ。』

家

旅舎生活する森彦は着物の始末をお俊の家へ頼んだ。お俊は長い袴の紐を結び直して、二人の叔父に別れて行つた。

漸く三吉は平常の調子に返つて、一日家を探し歩いたことを兄に話した。直樹が家の附近は、三吉も少年時代から青年時代へかけての記憶のあるところて、同じ町中を擇ぶとすれば、成るべく親戚や知人にも近く住みたい。それには、舊時直樹の家に入居した人の世話で、一軒二階建の家を見つけて來た。斯様な話をした。

『時に、延もお愛ちゃんの學校へ通はせることにしました。』と三吉が言つた。『その方が彼娘の爲めにも好さそうです。』

森彦は自分の娘が兄の娘に負けるやうでは口惜しいといふ眼付をした。

『まあ、學校の方のことは、お前に任せる……俺の積りでは、延に語學をウンと遣らせて、外交官の細君に向くやうな娘を造りたいと思つて居た。行く々は洋行でもさせたい位の意氣込だつた……』

家

『娘の性質にもありますサ。』

『俺の娘なら、もうすこし勇氣が有りさうなものだ。存外やオなものだ。』

と森彦は田舎訛を交へて、自分が子が自分の自由に成らないに、歎息した。

『實さんの家でも越すそらぢや有りませんか。』

『左様だそらな。どうも兄貴にも困りものだよ。一應俺に相談すれば彼様な眞似

はさせやしなかつた。その爲に俺の仕事まで、何程迷惑を蒙つたか知れない。彼様いふ兄貴の弟だ——直ぐそれを他に言はれる。實に、油斷も間隙もあつたもんぢや無い。奈何だ、そのうちに一度兄貴の家へ集まるまいか。どうしても東京に置いちや不可……満州の方にも追つて遣らにや不可……今度行つたら、俺がギユウといふ目に逢はせて呉れる。』

家

小泉の家の名譽と、實の一生とを思ふのあまり、森彦は高い調子に成つて行つた。斯の兄は、充實した身體の置場所に困るといふ風で、思はず言葉に力を入れた。その飛沫が正太にまで及んで行つた。兜町で儲けやうなどは、生意氣な、といふ語氣で話した。正太は幼少の頃、斯の兄の手許へ預けられたことが有るので、どうかすると森彦の方ではまだ子供のやうに思つて居た。

部屋の障子の開いたところから、青桐の葉が見える。寸三吉は廊下へ出て、町

々の家根を眺めた。

『お前が探して来た家は、二階があると言つたネ。二階も好いが、子供にはアブナイぞ。橋本の仙(正太の妹)などは幼少い時分に樓梯から落ちて、それで彼様な風に成つた——夫婦は二階で寝て居て知らなかつたといふ話だ——』

『でも、お仙さんは、房ちゃんと同じ病氣をしたと云ふぢや有りませんか。』

家 『何でも俺は左様いふ話を聞いた。』

三吉は森彦の前へ戻つて、眼に見えない二階の方を見るやうに、しばらく兄の顔を見た。

間もなく三吉は斯の二階を下りた。旅舎を出てから、『よく森彦さんは、彼様して長く獨りて居られるナア、』と思つて見た。電車で新宿まで乗つて、それから樹木の間を歩いて行くと、前方の屋根から夕餐の煙の登るのが見えた。三吉は家の前

を持つて、妻子の待つて居る方をさして急いだ。

家具といふ家具は動き始めた。寝る道具から物を食ふ道具まで互に重なり合つて、門の前にある荷車の上に積まれた。

家 『種ちゃん、彼方のお家の方へ行くんですよ。』

とお雪は下婢の背中に居る子供に頭巾を冠せて置いて、庭傳ひに女教師の家や植木屋へ別れを告げに行つた。斯うして、思出の多い家を出て、お雪は夫より一足先に娘達の墳墓の地を離れた。

町中にある家へ、彼女が子供や下婢と一緒に着いた時は、お延が皆なを待受けて居た。そこは、往時女髪結で直樹の家へ出入して、直樹の母親の髪を結つたとい

家

ふ老婆が見つけて呉れた家であつた。その老婆の娘で、直樹の父親の着物などを
 畳んだことのある人が、今では最早十五六に成る娘から『母親さん』と言はれる程
 の時代である。極く近く住むところから、その人達が土瓶や湯沸を提げて見舞に
 来て呉れた。お雪は手拭を冠つたり脱つたりした。
 静かな郊外に住慣れたお雪の耳には、種々な物賣の聲が賑かに聞えて来た。勇ま
 しい鬻賣の呼聲、豆腐屋の喇叭、齒入屋の鍔、其他郊外で聞かれなかつたやうな
 ものが、家の前を通る。表を往つたり来たりする他の主婦で、彼女のやうに東髪
 にした女は、殆んど無いと言つても可い。斯の都會の流行に後れまいとする人々
 の髪が、先づ彼女を驚かした。
 實の家からは、例の箆笥や膳箱などを送り届けて来た。いづれも東京へ出て来て
 からの實の生活の名残だ。大事に保存された古い器物ばかりだ。お雪はそれを受

取つて、自分の家の飾りとするのも氣の毒に思つた。
 夫は荷物と一緒に着いた。

『斯ういふところで、田舎風の生活をして見るのも面白いぢやないか。』

家

と三吉はお雪に言つた。お雪はよく働いた。夕方迄には、大抵に家の内が片付い
 た。荷車に積んで来たゴチャ／＼した家具は何處へ納まるともなく納まつた。改
 まつた畳の上で、お雪は皆なと一緒に、楽しさうに夕飯の膳に就いた。
 暮れてから、かはる／＼汗を流しに行つた女達は、あまり風呂場が明る過ぎてキ
 マリが悪い位だつた、と言つて歸つて来た。下婢は眼を圓くして飛んで来て、『こ
 の邊では、荒物屋の内儀さんまで三味線を引いて居ます。』とお雪に話した。長唄
 や常盤津が普通の家庭にまで入つて居ることは、田舎育ちの下婢にめづらしく思
 はれたのである。

『延ちゃん、一寸そこまで見に行つて來ませう。』
とお雪は姪を誘つた。

郊外の夜に比べると、數へきれないほどの町々の灯がお雪の眼にあつた。紅——青——黄——と一口に言つて了ふことの出來ない、強い弱い種々な火の色が、そこにも、こゝにも、都會の夜を照らして居た。お雪と姪とは、互に明るく映る顔を見合せた。二人は手を引き合つて歩いた。戻りがげに、町中を流れる暗い静かな水を見た。お雪は直樹の家に近く引移つて來たことを思つた。

家

三吉は最早響の中に居た。朝の騒々しさが納まつた頃は、電車の唸りだの、河蒸汽の笛だのが、特別に二階の部屋へ響いて來た。

『叔父さん、障子張りですか。』

と言ひながら、正太が樓梯を上つて來た。正太は袖と相前後して、兜町の方へ通ふことに成つた。

『相場師が今頃訪ねて來ても好いのかね。』と三吉は笑つて、張つた障子を壁に立掛けた。

家

『いえ、私はまだ店へ入つたばかりで、お客さまの形です。今ネ、一寸場を覗いて、それから廻つて來ました。』

正太は叔父の則で一服やつて、袂から細い打紐を取出した。叔父の家にある額の釣紐にもと思つて、途中から買求めて來たのである。彼は斯ういふことに好く氣がついた。

壁には田舎屋敷の庭の畫が掛けてあつた。正太はその釣紐を取替えて、結び方も

面白く掛直して見た。その書は、郊外に住む風景畫家の筆で、三吉に取つては忘れ難い山の生活の紀念であつた。

三吉は額を眺めて、舊いことまでも思出したやうに、

『Sさんも奈何して居るかなア。』

と風景畫家の噂をした。正太はずつと以前、染物織物などに志して、その爲に繪畫を修めやうとしたことが有る位で、風景畫家の仕事にも興味を持つて居た。

『Sさんには、此節は稀にしか逢はない。』と三吉は嘆息しながら、『何となく友達の遠く成つたのは、悲しいやうなものだネ。』

『オヤ、叔父さんは彼様して近く住んでいらしつたぢや有りませんか。』

『それがサ……斯の書をSさんが僕に描いて呉れた時分は、お互に山の上に居て、他に話相手も少いしネ、毎日のやうによく往來しましたッけ。僕が田圃側などに

家

轉がつて居ると、向の谷の方から三脚を持つた人がニコ／＼して歸つて来る——途次二人で書や風景の話などをして、それから僕がSさんの家へ寄ると、寫生を出して見せて呉れる、どうかすると夜遅くまでも話し込む——その家の庭先が斯の書サ。あの時分は實に楽しかつた……二度と彼様いふ話は出来なく成つて了つた……』

家

『友達も多く左様成りますネ。』

『何故そんな風に成つて來たか——それが僕によく解らなかつたんです。Sさんとは何事も君、お互に感情を害したやうなことが無いんだからネ。不思議でせう。實は、此頃、ある友達達の許へ寄つたところが、小泉君——Sさんが君のことをモルモットだと言つて居ましたぜ、斯う言ひますから、モルモットとは何だい、』と僕が聞いたら、大學の試験室へ行くと醫者が注射をして、種々な試験をするでせ

う。友達がモルモットで、僕が醫者だそうだ——』
 正太は噴飯した。

『まあ、聞給へ。考へて見ると、成程Sさんの言ふことが眞實だ。知らず／＼僕はその醫者に成つて居たんだネ。傍に立つて、知らう／＼として、觀て居られて見給へ——好い心地はしないや。何となくSさんが遠く成つたのは、始めて僕に解つて來た……』

家

復た正太は笑つた。

『しかし、正太さん、僕は唯——偶然に——そんな醫者に成つた譯でも無いんです。よく物を觀やう、それで僕はもう一度この世の中を見直さうと掛つたんです。研究、研究でネ。これがそも／＼他を苦しめたり、自分でも苦しんだりする原因なんてす……しかし、君、人間は一度可恐しい目に逢着して見給へ、いろ／＼な

ことを考へるやうに成るよ……子供が死んでから、僕は研究なんてことにも左様重きを置かなく成つた……』

明るい二階で、日あたりを描いた額の畫の上に、日があたつた。春蠶の済んだ後で、刈取られた桑畠に新芽の出たさま、林檎の影が庭にあるさまなど、玻璃越しに光つた。お雪は階下から上つて來た。

家

『父さん、障子が張れましたネ。』

『その額を御覽、正太さんが彼様いふ風に掛けて下さつた。』

『眞實に、正太さんは斯ういふことが御上手なんですねえ。』

とお雪は額の前に立つて、それから縁側のところへ出て見た。

『叔母さん、御覽なさい。』

と正太も立つて行つて、何となく江戸の残つた、古風な町々に續く家の屋根、狹

い往來を通る人々の風俗などを、叔母に指し見せた。

家

鹽瀬といふが正太の通ふ仲買店であつた。その店に縁故の深い人の世話で、叔父の三吉にも身元保證の判を捺かせ、當分は見習かたぐ外廻りの方をやつて居た。正太に比べると、榊の方は店も大きく、世話する人も好く、兎に角客分として扱はれた。二人ともまだ馴染が少なかつた。正太は店の大將にすらよく知られて居なかつた。毎日のやうに彼は下宿から通つた。

秋の蜻蛉が盛んに町の空を飛んだ。鹽瀬の店では一日の玉高の計算を終つた。後場は疾うに散けた。幹部を始め、其他の店員はいづれも歸りを急ぎつゝあつた。電話口へ馳付けるもの、飲仲間を誘ふもの、いろくあつた。正太は鹽瀬の暖簾

を潜り抜けて、榊の待つて居る店の方へ行つた。

二人は三吉の家をさして出掛けた。大きな建築物のせゝこましく並んだ町を折れ曲つて電車を待つところへ歩いて行つた。株の高低に激しく神経を刺激された人達、二人の前を右に往き、左に往きした。電車て川の岸まで乗つて、それから復た二人はぶらぶら歩いた。

家

途中で、榊は立留つて、

『成金を通るネ——護謨輪かなんかで。』

と言つて見て、情婦の懐へと急ぎつゝあるやうな、意氣揚々とした車上の人を見送つた。榊も正太も無言の侮辱を感じた。榊は齟齬と働いて得た報酬を一夕の歡樂に擲たうと思つた。

橋を渡ると、青い香も失せたやうな柳の葉が、石垣のところから垂下つて居る。

細長い條を通して、逆に溢れ込む活々とした潮が見える。その邊まで行くと、三吉の家は近かつた。

「榊君——小泉の叔父の近所にネ、そもく洋食屋を始めたといふ家が有る。建物などは、古い小さなものサ。面白いと思ふことは、僕の阿爺が昔流行つた獵虎の帽子を冠つて、酒を飲みに来た頃から、その家は有るんだトサ。そこへ叔父を誘つて行かうぢやないか。一夕昔を忍ばうぢやないか。」

家

『そんなケチ臭いことを言ふナ。そりや、今日の吾儕の境涯では、一月の月給が一晩も騒げば消えて了ふサ。それが、君、何だ。一掴千金を夢みる株屋ぢやないか——今夜は僕が奢る。』

二人は歩きながら笑つた。

父の夢は子の胸に復活つた。『金釵』とか、『香影』とか、左様いふ漢詩に残つた趣

のある言葉が正太の胸を往來した。名高い歌妓が黒緇子の襟を掛けて、素足で客を疑待したといふ父の若い時代を可懐しく思つた。しばらく彼は、樺太で難義したことや、青森の旅舎で煩つたことを忘れた。舊い屋根船の趣味などを想像して歩いた。

家

『ち揃ひですか。』

と三吉は机を離れて、客を二階の部屋へ迎へた。

兜町の方へ通ふやうに成つてから、榊は始めて三吉と顔を合せた。榊も、正太もまだ何となく舊家の主人公らしかつた。言葉遣ひなども、妙に丁寧に成つたり、書生流儀に成つたりした。

「叔母さん、おめづらしう御座いますネ。」

と正太は茶を持って上つて来た叔母の髪に目をつけた。お雪は束髪を止して、下町風の丸鬘にして居た。

お雪が下りて行つた後で、榊は三吉と正太の顔を見比べて、

「ねえ、橋本君、先づ吾儕の商賣は、女で言ふと丁度藝者のやうなものだネ。御客大明神と崇め奉つて、ペコ／＼辭御儀をして、それてまあ玉を付けて貰ふんだ。そこへ行くと、先生は藝術家とか何とか言つて、乙に構へても居られる……大した相違のものだネ。」

三吉は「復た始まつた」といふ眼付をした。

「先生でなくても、君でも可いや——ねえ、小泉君、僕が斯様な商賣を始めたと言つたら、君などは奈何思ふか知らないが——」

家

「叔父さんなんぞは何とも思つてやしません。」と正太が言つた。

「榊が居ると思はないで、こゝに幫間が一人居ると思つて呉れ給へ——ねえ、橋本君、まあお互に其様なもんぢやないか。」と言つて、榊は急に正太の方に向いて、「奈何だい、君、今日の相場は。僕は最早傍觀して居られなく成つた。他の儲けるところを、君、黙つて觀て居られるもんか。」

家

「ドシンと来たねえ。」

「奈何だい、君、二人で大に行らうぢやないか。」

笛、太鼓の囃子の音が起つた。芝居の廣告の幟が幾つとなく揃つて、二階の欄の外を通り過ぎた。話も通じないほどの騒ぎで、狭い往來からは口上言ひの聲が高く響き渡つた。階下では、種夫を背負つた人が、見せに出るらしかつた。親戚の娘達の賑かな笑聲も聞えた。

やがて、榊は三吉の方を見て、

『小泉君の前ですが、君は僕の家内にも逢つて、覚えて居られるでせう。家内は今、郷里に居ます。時々家のことを書いた長い手紙を寄越します。それを讀むと僕は涙が流れて、夜も碌に眠られないことがあります……眠らずに考へます：しかし四日も経つと、復た僕は忘れて了ふ……極く正直な話が、左様なんです。なにしろ僕などは、三十萬の借財を親から譲られて、それを自分の代に六十萬に増しました……』

正太も首を振つて、感慨に堪えないといふ風であつた。思ひついたやうに、懐中時計を取出して見て、

『叔父さん、今晚は榊さんが夕飯を差上げるさうです。何卒御交際下さいまし。』と言つて御辭儀をしたので、榊も話を一丁切にした。

家

其時親類の娘達がドヤ／＼樓梯を上つて來た。

『兄さん、左様なら。』とお愛が手をついて挨拶した。

『お愛ちゃん、學校の方の届は？』と三吉が聞いた。

『今、姉さんに書いて頂きました。』

『叔父さん、私も失禮します。』とお俊はすこし改まつた調子で言つて、正太や榊にも御辭儀をした。

家

『左様なら。』とお鶴も姉の後に居て言つた。

斯の娘達を送りながら、三吉は客と一緒に階下へ降りた。彼は正太に向つて、今度引移つた實の家の方へ、お延を預ける都合に成つたことなどを話した。

階下の部屋は一時混雑した。親類の娘達の中にも、お愛の優美な服装が殊に目立つた。お俊は自分の筆で書いた秋草模様の帯を帯て居た。彼女は長いこと使ひ慣

れた簞笥が、叔父の家の方に来て居るのを見て、ナサケナイといふ眼付をした。順に娘達はち雪に挨拶して出た。ついで、三吉も出た。門の前には正太や榊が待つて居た。未だ日の暮れないうちから、軒燈を点ける人が往來を馳け歩いた。町はチラ／＼光つて來た。

水は障子の外を緩く流れて居た。榊、正太の二人は電燈の飾りつけてある部屋へ三吉を案内した。叔父の家へ寄る前に、正太が橋の畔で見た青い潮は、耳に近くヒタ／＼と喃語くやうに聞えて來た。

榊は障子を明け拂つて、

『橋本君、斯ういふところへ來て樂めるといふのも、矢張……』

『金！ 金！』

と正太は榊が皆な言はないうちに、言つた。榊は正太の肩をつかまへて、二度も三度も揺つた。『然り、然り、』といふ意味を通はせたのである。

三吉が立つて水を眺めて居るうちに、女中が膳を運んで來た。一番いける口の榊は、種々な意味で祝盃を擧げ始めた。

『姉さんにも一つ進ませう。』と榊は女中へ盃を差した。『奈何です、僕等はこれにて何商賣と見えますか？』

女中は盃を置いて、客の様子を見比べた。

『私は何と見えますか？』と正太が返事を待兼ねるやうに言つた。

『さあ、御見受申したところ……袋物でも御商ひに成りませうか。』

『オヤ／＼、未だ素人としか見られないか。』と正太は頭を搔いた。

榊も噴飯した。『姉さん、この二人は株屋に成りたてなんです。まだ成りたてのホヤ／＼なんです。』

『あれ、兜町の方でいらっしやいましたか。あちらの方は、よく姐さん方が大騒ぎを成さいます。』

家

斯う女中は愛想よく答へたが、よくある客の戯れといふ風に取つたらしかつた。女中は半信半疑の眼付をして意味もなく、軽く笑つた。

知らない顔の客のことで、口を掛ければ直ぐに飛んで来るやうな、中年増の妓が傍へ来て、先づ酒の興を助けた。庭を隔て、明るく映る障子の方では、放肆な笑聲が起る。盛んな三味線の音は水は響いて楽しさうに聞える。全盛を極める人があるらしい。何時の間にか、榊や正太は腰の低い『幫間』で無かつた。意氣昂然とした客であつた。

『向ふの座敷ぢや、大にモテるネ。』

と榊は正太に言つた。こゝにも二人は言ふに言はれぬ侮辱を感じた。それに、扱ひかねて居る女中の様子と、馴染の無い客に對する妓の冷淡とが、何となく二人の矜持を傷けた。殊に、榊は不愉快な眼付をして、楽しい酒の香を嗅いだ。

『貴方一つ頂かして下さいな。』

家

とその中年増が、自信の無い眼付をして、盃を所望した。世に後れても、それを知らずに居るやうな人で、座敷を締める力も無かつた。

そのうちに、今一人若い妓か興を助けに来た。歌が始まつた。

『姐さん、一つ二上りを行かう。』

と言つて、正太は父によく似た清しい、鈴の加はつた聲で歌ひ出した。

『好い聲だねえ。橋本君の唄は始めてだ。』と榊が言つた。

「叔父さんの前で、私が歌つたのも今夜始めてです。ね。」と正太は三吉の方を見て微笑んだ。

「小泉君の酔つたところを見たことが無い——一つ酔はせなけりや不可。」と榊が盃を差した。

「すこし御酔ひなさいよ。貴方。」と中年増の妓が銚子を持添えて勧めた。

家

三吉は酒が發したと見えて、顔を紅くして居た。それで居ながら、妙に醒めて居た。彼は酔はうとして、いくら盃を重ねて見ても、どうしても酔へなかつた。

唯、夕飯の馳走にでも成るやうに、心易い人達を相手にして、談したり笑つたりした。

「是方は召上らないのね。」
と若い妓が中年増に言つた。

夜が更けるにつれて、座敷は崩れるばかりであつた。「何か伺ひませう」とか、「心意氣をお聞かせなさいな」とか、中年増は客に對つて、ノベツに催促した。若い方の妓は、懷中から小さな鏡を取出して、客の見て居る前で顔中拭き廻した。

榊は大分酔つた。若い方が御辭儀をして歸りかける頃は、榊は見るもの聞くもの面白くないといふ風で、面のあたりその妓を罵つた。そして、貰つて歸つて行つ

家

た後で、腐つた肉にとまる蠅のやうに言つて笑つた。折角樂みに來ても、樂めないて居るやうな客の前には、中年の女が手持無沙汰に銚子を振つて見て、恐れたり震へたりした。

酒も冷く成つた。

ポーンといふ音が夜の水に響いて聞えた。假色を船で流して來た。榊は正太の膝を枕にして、互に手を執りながら、訴へるやうな男や女の作り聲を聞いた。三吉

も横に成つた。

三人が斯の部屋を離れた頃は、遅かつた。屋外へ出て、正太は獨語のやうに、遺
漸ない心を自分で言ひ慰めた。

『今に、ウンと一つ遊んで見せるぞ。』

「小泉君、君は歸るのかい……野暮臭い人間だナア。』

家

と榊は正太の手を引いて、三吉に別れて行つた。

三吉は森彦から手紙を受取つた。森彦の書くことは、いつも簡短である。兄弟で
實の家へ集まらう、實が今後の方針に就いて斷然たる決心を促さう、と要領だけ
を世慣れた調子で認めて、猶、物のキマリをつけなければ、安心が出来ないかの

やうに書いて寄した。

家

弟達は兄を思ふばかりで無かつた。度々の兄の失敗に懲りて、自分等をも護ら
なければ成らなかつた。で、雨降揚句の日に、三吉も兄の家を指して出掛けた。
沼のやうに濕氣の多い町。沈滞した生活。溝は深く、道路は悪く、往來の人は泥
をこねて歩いた。それを通り越したところに、引近んだ閑静な町がある。門構へ
の家が續いて居る。その一つに實の家族が住んで居た。

『三吉叔父さんが被入しつた。』

とお俊が待受顔に出て迎へた。お延も顔を出した。

『森彦さんは？』

『先刻から来て待つていらしつてよ。』

とお俊は玄關のところで挨拶した。彼女は大略その日の相談を想像して、心配ら

しい様子をして居た。

「鶴ちゃん、御友達の許へ遊びに行つてらっしゃい。」お俊は獨りて氣を揉んだ。
 「左様だ、鶴ちゃんは遊びに行くが可い。」

とお倉も姉娘の後に附いて言つた。『斯ういふ時には、延ちゃんも氣を利かして、避けて呉れ、ば可いに。』とお俊はそれを眼で言はせたが、お延には奈何して可いか解らなかつた。斯の娘は、三吉叔父の方から移つて間もないこととて、唯マゴマゴして居た。

家

實は部屋を片付けたり、茶の用意をしたりして、三吉の來るのを待つて居た。三人の兄弟は、會議を開く前に、集て茶を嚙んだ。其時實は起つて行つて、戸柵の中から古い箱を取出した。塵埃を拂つて、それを弟の前に置いた。

『是は三吉の方へ遣て置かう。』

と保管を托するやうに言つた。父の遺筆である。忠實を紀念するものは次第に散つて了つた。この古い箱一つ残つた。

『どれ、話すことは早く話して了はう。』と森彦が言出した。

お俊は最早氣が氣でなかつた。母は、と見ると、障子のところに身を寄せて、聞耳を立て、居る。從姉妹は長火鉢の側に俯向いて居る。彼女は父や叔父達の集つた部屋の隅へ行つて、自分の机に身を持たせ掛けた。後日のために、よく話を聞いて置かうと思つた。

家

『そんなトロクサイことぢや、ダチカン。』と森彦が言つた。『滿洲行と定めたら、直ぐに出掛ける位の勇氣が無けりや。』

『俺も身體は強壯だしな。』と實はそれを受けて、『家の仕末さへつけば、明日にも出掛けたいと思つてる。』

『後は奈何にても成るサ。私も居れば、三吉も居る』

『むう——引受けて呉れるか——有難い。それをお前達が承知して呉れさへすれば、俺は安心して發てる。』

斯ういふ大人同志の無造作な話は、お俊を驚かした。彼女は父の方を見た。父は細かく書いた勘定書を出して叔父達に示した。多年の間、森彦の胸にあつたことは、一時に口を衝いて出て來た。斯の叔父は『兄さん』といふ言葉を用ひて居なかつた。『お前が』とか、『お前は』とか言つた。そして、聲を低くして、父の顔色が變るほど今日迄の行爲を責めた。

お俊は奈何成つて行くことかと思つた。勘忍強い父は黙つて森彦叔父の鞭鞭を受けた。斯の叔父の癖で、言葉に力が入り過ぎるほど入つた。それを聞いて居るとお俊は反つて不幸な父を憐んだ。

『俊、先刻の物をこゝへ出せや。』

と父に言はれて、お俊はホツと息を吐いた。彼女は母を助けて、用意したものを奥の部屋の方へ運んだ。

『さあ、何物もないが、晝飯をやつとくれ。』と實は家長らしい調子に返つた。

三人の兄弟は一緒に食卓に就いた。口に出さない迄も、實にはそれが別離の食事である。箸を執つてから、森彦も悪い顔は見せなかつた。

『む、是はナカク甘い。』と森彦は吸物の出來を賞めて、氣忙しなく吸つた。

『さ、何卒おかへなすつて下さい。』と、舊い小泉の家風を思はせるやうに、お介は款待した。

皆な笑ひながら食つた。

間もなく森彦、三吉の二人は兄の家を出た。半町ばかり泥濘の中を歩いて行つた

ところで、森彦は弟を顧みて、

『あの位、俺が言つたら、兄貴もすこしはコタへたらう。』

と言つて見たが、其時は二人とも笑へなかつた。實の家族と、病身な宗藏とは、復た二人の肩に掛つて居た。

家

『鶴ちゃん。』

とお俊は、叔父達の行つた後で、探して歩いた。

『父さんが明日御出發なさるといふのに……何處へ遊びに行つてるんだらうねえ……』

と彼女は身を震はせながら言つて見た。一軒心當りの家へ寄つて、そこで妹が友

達と遊んで歸つたことを聞いた。急いで自分の家の方へ引返して行つた。

斯様に急に父の滿洲行が来やうとは、お俊も思ひがけなかつた。家のものに左様委しいことも聞かせず、快活らしく笑つて、最早旅仕度にこそがしい父——狼狽して居る母——未だ無邪氣な妹——お俊は涙なしに斯の家の内の光景を見ることが出来なかつた。

家

長い悲惨な留守居の後で、漸く父と一緒に成れたのは、實に昨日のことのやうに娘の心に思はれて居た。復た別れの日が来た。父を逐ふものは叔父達だ。頼りの無い家のものゝ手から、父を奪ふのも、叔父達だ。斯の考へは、お俊の小さな胸に制へ難い口惜しさを起させた。可厭しい親戚の前に頭を下げて、母子の生命を托さなければ成らないか、と思ふ心は、一家の零落を哀しむ心に混つて、涙を流させた。

叔父達に反抗する心が起つた。彼女は餘程自分でシツカリしなければ成らないと思つた。弱い、年をとつた母のことを考へると、泣いてばかり居る場合には無いとも思つた。其晩は母と二人で遅くまで起きて、不幸な父の爲に旅の衣服などを調へた。

家

『母親さん、すこし寝ませう——どうせ眠られもしますまいけれど。』
と言つて、お俊は父の側に寝た。

紅い、寂しい百日紅の花は、未だお俊の眼にあつた。彼女は暗い部屋の内うちに居ても、一夏を叔父の傍で送つたあの郊外かうがいの家を見ることが出来た。斯様に早く父に別れるとしたら、何故父の傍に居なかつたらう、何故叔父を遠くから眺めて置かなかつたらう。

『可厭だ——可厭だ——』

斯う寢床ねとこの中で繰返して、それから復た種々な他の考へに移つて行つた。父も碌ろくに眠らなかつた。何度も寢返を打つた。

未だ夜の明けない中に、實は寢床に離れた。つゞいてお倉やお俊が起きた。

『母親さん、鶏にわとりが鳴いてるわねえ。』

と娘は母に言ひながら、寢衣を着更へたり、帯をやりした。

家

赤い釣洋燈つりあんぶの光はシヨンボリと家の内を照して居た。臺所の方では火が燃えた。

やがてお倉は焚落したきおとしを十能のうに取つて、長火鉢ながひばちの方へ運んだ。そのうちにお延やお鶴も起きて來た。

小泉の家では、先代から佛を祭らなかつた。『御靈様』と稱へて、神棚かみだだけ飾つてあつた。そこへ實は拜みに行つた。父忠寛は未だその神の影かげに居て、子の遠い旅立だちを送るかのやうにも見える、實は柏手を打つて、先祖の靈れいに別離わかれを告げた。

お倉やお俊は主人の膳を長火鉢の側に用意した。暗い涙は母子の頬を傳ひつゝあつた。實は一同を集めて、一緒に別離の茶を飲んだ。復た鶏が鳴いた。夜も白々明け放れるらしかった。

『皆な、屋外へ出ちや不可よ……家に居なくちや不可よ……』

家

實は、屋外まで見送らうとする家のものを制して置いて、獨りて門を出た。強い身體と勇氣とは猶頼めるとしても、彼は年五十を超えて居た。懐中には、神戸の方に居るといふ達雄の荷まで辿りつくだけの旅費しか無かつた。滿洲の野は遠い。生きて還ることは、あるひは期し難かつた。斯うして雄々しい志を抱いて、彼は妻子の住む町を離れて行つた。

五

家

お雪は張物板を抱いて屋並に續いた門の外へ出た。三吉は家に居なかつた。町中に射す十月下旬の日をうけて、門前に立掛けて置いた張物板はよく乾いた。襖掛けて、お雪がそれを取込まうとして居ると、めづらしい女の客が訪ねて來た。

『まあ、豊世さん——』

お雪は襖を釋した。張物もそこくにして、正太の細君を迎へた。

『叔母さん、眞實にお久し振ですねえ。』

豊世は入口の庭で言つて、絹の着物の音をさせながら上つた。

久し振の上京で、豊世は叔母の顔を見ると、何から言出して可いか解らなかつた。坐蒲團を敷いて坐る前に、お房やお菊の巾みだの、郷里に居る姑からの言傳だの、夫が来てよく世話に成る禮だのを述べた。

「叔母さん、私もこれから相場師の内儀さんですよ。」

と軽く笑つて、豊世は自分で自分の境涯の變遷に驚くといふ風であつた。

「種ちゃん、御辭儀は？」とお雪は眼を圓くして來た子供に言つた。

「種ちゃんも大きく御成なさいましたねえ。」

「豊世叔母さんだよ、お前。」

「種ちゃん、一寸來て御覽なさい。叔母さんを覚えて居ますか。好い物を進げますよ。」

家

種夫は人見知りをして、母の背後に隠れた。

「種ちゃん幾歳に成るの？」と豊世が聞いた。

「最早、貴方三つに成りますよ。」

「早いもんですねえ。自分達の年をとるのは解りませんが、子供を見ると左様思ひますわ。」

家

其時、壁によせて寝かしてあつた乳呑兒が泣出した。お雪は抱いて來て、豊世に見せた。

「これが今度お出來なすつた赤さん？」と豊世が言つた。先には女の御兒さんばかりでしたが、今度は又、男の御兒さんばかり。でも、叔母さんは斯様にお出來さなるから宜う御座んすわ。」

「幾ちゃん。」とお雪は顧みて呼んだ。

お幾はお雪が末の妹で、お延と同じ學校に入つて居た。丁度、寄宿舎から遊びに来た日で、客の爲に茶を入れて出した。

『先によくお目に掛つた方は？』

『愛ちゃんですか。あの人は卒業して國へ歸りました。今に、お嫁さんに成る位です。』

家

『左様ですかねえ。お俊ちゃんなどが最早立派なお嫁さんですものねえ。』

しばらく静かな山の中に居て單調な生活に飽いて来た豊世には、見るもの聞くものが新しかつた。正太も既に一戸を構へた。川を隔て、三吉とは左程遠くないところに住んで居た。豊世は多くの希望を抱いて、姑の傍を離れて来たのである。其日、豊世はあまり長くも話さなかつた。鹽瀬の大將の細君といふ人にも逢つて来たことや、森彦叔父の旅舎へも顔を出したことを言つた。これから一寸買

物して歸つて、早く自分の思ふやうに新しい家を整へたいと言つた。

『叔母さん、奈様に私は是方へ參るのが楽しみだか知れませんでしたよ。お近う御座いますから、復たこれから度々寄せて頂きます。』

斯う豊世は優しく言つて、心忙はしさを歸つて行つた。お雪は張物板を取込みに出た。

家

暗くなつてから、三吉は歸つて来た。彼は新規な長い仕事に取掛つた頃であつた。遊び疲れて早く寝た子供の顔を覗きに行つて、それから洋服を脱ぎ始めた。お雪は夫の上衣などを受取りながら、

『先刻、豊世さんが被入ツしやいましたよ。橋本の姉さんから小鳥を頂きました。』

た。』

『へえ、そいつは珍しい物を貰つたネ。豊世さん、豊世さんって、よくお前は噂をして居たつげが。奈何だね、あの人の話は。』

『私などは……彼様いふ人の傍へは寄れない。』

『よく交際つて見なけりや解らないサ。なにしろ親類が川の周圍へ集つて來たのは面白よ。』

家

三吉は白シャツまで脱いだ。そこへ正太がブラリと入つて來た。芝居の噺や長唄の會の話などをした後で、

『叔父さん、私は未だ御飯前なんです。』

斯様なことを言出した。その邊へ案内して、初冬らしい夜を語りたといふのであつた。

『オイ、お雪、今の洋服を出して呉れ。正太さんが飯を食ひに行くと云ふから、

俺も一緒に話しに行つて來る。』

『男の方といふものは、氣樂なものですねえ。』

お雪は笑つた。三吉は一旦脱いだ白シャツに復た手を通して、服も着けた。正太は紺色の長い紐を襟巻がはりにして、雪踏の音などをさせながら、叔父と一緒に門を出た。

家

『何となく君は兜町の方の人らしく成つたネ。時に、正太さん、君は何處へ連れて行く積りか。』

『叔父さん、今夜は私に任せて下さい。種々御世話にも成りましたから、今夜は私に奢らせて下さい。』

斯う二人は話しながら歩いた。

町々の灯は歡樂の世界へと正太の心を誘ふやうに見えた。昂つたとか、降つたとか言つて、賣つたり買つたりする取引場の喧器——浮沈する人々の變遷——狂人のやうな眼——激しく罵る聲——左様いふ混雑の中で、正太は毎日のやうに刺激を受けた。彼は家にジツとして居られなかつた。夜の火をめぐけて羽蟲が飛ぶやうに、自然と彼の足は他の遊びに行く方へ向いて居た。電車で、ある停留場まで乗つて、正太は更に車を二臺命じた。車は大きな橋を渡つて、また小さな橋を渡つた。

家

風は無いが、冷える晩であつた。三吉は正太に案内されて、廣い静かな座敷へ来て居た。水に臨んだ方は硝子戸と兩戸が二重に閉めてあつて、それが内の障子の

嵌硝子から寒さうに透けて見えた。

女中が火を運んで來た。洋服で震へて來た三吉は、大きな食卓の側に火鉢を擁えて、先づ凍えた身體を温めた。

正太は料理を通して置いて、

『それからねえ、姉さん、小金さんに一つ掛けて下さる。』

家

『小金さんは今、彼方の御座敷です。』

『先程は電話で失禮、——左様仰つて下されば解ります。』

それを聞いて、女中は出て行つた。

『叔父さん、斯うして名刺を一枚出しさへすれば、何處へ行つても通ります——鹽瀬の店は今兜町でも賣ツ子なんてすからネ。』と正太は、紙入から自分の名刺を取出して、食卓の上に置いて見せた。

家

正太の話は兜町の生活に移つて行つた。漸く鹽瀬の大將に知られて重なる店員の一人と成つたこと、その爲には随分働きもしたもので、他の嫌がる帳簿は二晩も寝ずに整理したことを叔父に話した。彼は又、相場師生活の一例として、仕立てたばかりの春衣が仕附絲のまゝ、年の暮に七つ屋の藏へ行くことなどを話した。『左様言へば、今は實に可恐しい時代ですネ。』と正太は思出したやうに、『此頃、私がお俊ちやんの家へ寄つて、「鶴ちやん、お前さんは大きく成つたら奈様なところへお嫁に行くネ」と聞きましたら——あんな子供がですよ——軍人さんはお金が無いし、お医者さんはお金が有つても忙しいし、美しい着物が着られてお金があるから大きな呉服屋さんへお嫁に行きたいですト——それを聞いた時は、私はゾーとしましたネ。』

斯様な話をして居るうちに、料理が食卓の上に並んだ。小金が来た。小金は三吉に挨拶して、馴々しく正太の傍へ寄つた。親孝行などとも言ひそうな、温順しい盛りの年頃の妓だ。

『橋本さん、老松姐さんもこゝへ呼びませう——今、御座敷へ来て申すから。』と言つて、小金は重い贅澤な着物の音をさせながら出て行つた。

土地に居着のものは、昔の深川藝者の面影がある。それを正太は叔父に見て貰ひたかつた。斯ういふところへ来て、彼は江戸の香を嗅ぎ、残つた音曲を耳にし、通人の遺風を楽しみまうとして居た。

小金、老松、それから今一人の年増が一緒に興を添えに來た。老松は未だ何處かに色香の名残をとどめたやうな老妓で、白い、細い、指輪を嵌めた手で、酒を勧めた。

『老松さん、今夜は斯ういふ客を連れて來ました。』と正太が言つた。『御馳走に何

家